**№9　テーマ『人生の鉄則』**

**講話日2004年11月29日**

**司会：先生、よろしくお願いいたします。**

**芳村：はい。皆さん、こんばんは。**

**一同：こんばんは。**

**芳村：もう今年最後のお話になるわけですけども、今日のテーマは「人生の鉄則」、これは前回、どうすればこの自分の人生の理想、目的というものを持つことができるのか、つくることができるのか。そういうこの理想、目的、志のつくり方ということで、いろいろお話をしたんですけども、そういう理想をどういうふうな手順を踏んで実現していくかですね、これは自己実現の人生というものを歩むための基本原理ということについてのお話になるわけですけども、自己実現の人生を歩むためには、どういうことにこの意を用いながら、人生を生きていったらよいのか。そういう意味で人生の鉄則。鉄則ということは、これだけは外してはならないという鉄のおきてみたいなもんですけども、そういうこの原則的にこれだけは忘れたらいけないという、そういう原理についてお話をしていきたいと思います。**

**レジュメにだいたい流れが書いてあるわけですけども、まずその人生を生きる舞台は社会ですので、社会の中で基本的に要求される事柄というのは、他人から信頼され、信用されることである。で、この他人から信頼され、信用されるために、自分自身がしなければならない努力、それがこの自信をつくるということなんですね。この自分で自分が信じられないような人間を誰が信じてくれるんだっちゅうことになりますから、だから、他人から信頼され、信用されるという、そういうこの結果を持つためにはですね、われわれは、まずは自信をつくるという努力をしなければならない。だけども、自信だけではこの、かえって自信過剰になってしまって、それがためにまたこの他人から批判され、嫌がられるというようなことにこうなってしまうこともありますので、自信と必ずその裏と表に付いていなければならないものは謙虚さということなんですね。**

**で、その意味で、まず第１番目の人生の鉄則としては、自信と謙虚さをつくるということが、まず第１番目のテーマになります。で、自信をつくるために、自分がどういう努力をするか。それがこの信じるに足る軸をつくるという、そういうこの課題を自分が持つことなんですね。信じるに足る軸をつくる。信じるに足る軸をつくる。で、この信じるに足る軸をつくるためにはどうしたらよいのか。いわゆる、この不完全なる人間が、自信を持って生きていくというふうな、そういうことの力を持つためにはどういう努力をしたらよいのかということになるわけですけど、人間的自信というものをつくるためにはですね、人間というものが基本的にこの理性、感性、肉体という３つの要素の、その有機的な連関性から人間は成り立っておるということを、基本的に考えなければなりません。人間という命が、理性、感性、肉体という、３つのこの要素が有機的に絡み合って人間という命をつくっておる。で、そういう３つの要素が絡み合ってですね、自信というのが命から湧いてくる。で、自信というものが、命からこう、じじーんと湧いてくるというですね、そういうふうなこの構造に持っていくためには、理性、感性、肉体というものの有機的な相乗効果というものが大事であります。**

**その意味で、人間的自信というものをつくるためには、すなわち仕事をしていく上でも、人生を生き切るうえでも、とにかく自信を持って生きていくという状態に自分を近づけていく。そういうふうなことをしようと思ったならばですね、まずは理性という観点から自信をつくるためにはどうするか。あるいは、感性という観点から自信をつくるためにはどうするか。その次には、肉体という観点から自信をつくるためにはどうするか。そういうふうに考えていって、そして、それぞれの原理からの自信のつくり方というものは、この互いに結び合ってですね、有機的に結び合って、その相乗効果としてその人の自信が湧いてくるという、そういう構造ができるというのが、自信というもののつくり方というものを学問的に考えた場合の基本原理であります。自信をつくるためには、まずは人間が理性、感性、肉体という３つの要素から成り立っておるっちゅうことを考えて、そして、理性という観点から自信をつくるためにはどうするか。感性という観点から自信をつくるためにはどうするか。そして、肉体という観点から自信をつくるためにはどうするか。そういうふうに考えていって、そして、その３つの要素の有機的な絡み合いからですね、その相乗効果として自信が命から湧いてくる。そういう構造になるわけですね。**

**そこでまず、理性という観点から自信をつくるためにはどうするかというとですね、その基本原理は、学問的知識をこの追求するという努力であります。で、この社会に出てしまうと、その学問的知識を吸収するという、そういう努力があんまりできなくなってしまって、もっぱらこの仕事をしながらですね、仕事を通して得た体験に基づく自信というものだけで仕事をしてしまうという状況になってしまいやすい。社会に出てしまうと、学問とのつながり、関係性というものを忘れてしまって、仕事で得たこの仕事による体験に基づく自信だけで、この仕事をしてしまうということになってしまいやすい。だけども、体験、経験というものは個人的なものであって、体験、経験から得られる自信というものは、それも大事なもんなんですけども、だけども、それだけではですね、この個の限界を超え難い。個人的なレベルの自信というものを超えられないで、多くの人から自分が信用してもらえる。多くの人からこの信頼を獲得できる。そういうふうなですね、力にはならないんですね。**

**ところが、その学問的知識というものはどういうものかといったら、学問的知識というものは、同時代に住んでおる人間であるならば、同じ時代に住んでおる人間であるならば、誰もがそうだと認めなければならないという根拠が明確に与えられておるものが学問的知識ですので、自分の仕事に関わる領域における学問的知識をどれだけ自分がこの高度に、より深く身に付けておるか。それがですね、この社会においてはものすごく大きな、他人から信頼され、信用されるための原理になるわけですね。テレビなんかにこう出てきても、普通の人がものを言ったんではそうかもしれないぐらいの程度なんですけども、大学の先生が出てきてこうですと言うと、もう無条件に、ああ、そうなんだとこう思ってしまって、すぐ信じてしまうということもありますし、またわれわれが、この商品を買う場合でもですね、何種類か同じようなものが出ておるとですね、その説明書を読んだりなんかして、で、どれを買うかということを決める判断基準というものは、その説明書に書いてある学問的なさまざまなこの内容がですね、信じられると思ったときにそれを買うということになってきて、非常にこのわれわれがものを選択したりですね、人を信用したりする場合に、その判断基準として学問的知識がちゃんとあるかないかということが非常に大きな基準になってるわけですね。**

**その意味で、われわれが社会において、他人から信頼され、信頼、信用されようと思ったならば、まず今、自分がやっておる仕事に関わる学問的知識というものをですね、このできるだけより高度に、より深く、より広く求めていく。そういうふうな努力をすることは非常に大事なことになってくると。とにかく、この体験、経験に基づく仕事というものは個の限界を超えない。だけども、自分の仕事に関わる学問的知識というものをより多く求めていくという努力をするとですね、それがこの消費者の信頼、信用を獲得できる。あるいは、社会的な信頼、信用を獲得できる。そういうことのための非常に大事な規則になる。だけども、体験、経験が全然、無意味だということではないので、体験、経験も大事なんですけども、この自分の体験、経験から得た自信というものをさらにこの学問的知識の根拠の上に立脚させるというですね、そういう構造になったとき、本当に自信というのが湧いてきますので、学問的な根拠のないような、そういう体験、経験だけの自信というものは非常にその広がりを持ちにくい、そういうものですね。ですから、まず基本的には、今、自分のやってる仕事に関わる学問的知識をとことん求めていく。そういう努力を現役で仕事をしてる間は常に続けていなければならない。**

**で、なぜ常にということを言うかというと、常にそういうこの学問的な知識というのは**

**日進月歩、どんどん研究が進んできまして、量が増えてくる。あるいは、昨日まで真理だ、本当のことだと言われておったものがですね、そのより新しいこのことがわかってきてですね、昨日まで本当のことだと思っておったものが、その今日にはうそになってしまうということもありますので、常に自分が仕事に関わる、そういうこの者としてですね、知識を持とうとする場合には、常にその学問的な進歩に関心を持って、そして、そのとき、そのときにおいて、信用できる。そういうこの学問的知識をですね、常に追求している。そういうふうなご姿勢が、現役で仕事をしてる間は大事なんですね。**

**もうそうしないと、消費者に本当に的確な、この知識を提供して、そのことによって信頼を得るということがなかなかできない。もし何かしら、本当は知っていなければならないことでもですね、この消費者から質問されて、そしてどうもそれが自分ではっきりわからんという場合には、あまりいいかげんなことを言うと、それがこの大きなつまずきのもとになって、あの会社の社員は信頼できないっちゅうことになってきたりしますので、わからん場合には堂々とですね、本当は知っていなければならんことなんですけども、勉強不足でちょっと私は、はっきりしたことは申し上げられません。だから、もう一度ちゃんと調べてきて、報告に来ますと言ってですね、そして、帰ってちゃんと調べて、そしてこうこう、こうでしたっちゅうて報告に行くと、そのほうが、いいかげんなことを言うよりは、そのほうがかえってですね、やっぱりあの会社の社員はしっかりしてる。本当にこう人間として信頼できるというふうな、そういうこの評価を得たりする。**

**だけど、ついつい、この日常的にはですね、いいかげんなことを、あんまりちゃんと知ってないのに、知ったかぶりして、いいかげんなことを言う人も随分と多いんですよね。そういうことが大きな他人からの信頼をなくするきっかけになったりしますので、ぜひそういうことがないように。特に、仕事の上でのですね、知識においては、決してあやふやなことを言わないように。もし自分の中であやふやであったならばですね、そのことを正直に言ったほうが、かえって信頼されるということになるわけですね。で、ちょっと十分に説明できませんので、もう一度ちゃんと会社に帰って調べてきて、はっきりしたことをご報告申し上げますと言ってですね、で、帰ってきて、そして、ちゃんと調べてまた報告に行く。そうすれば、あの会社の社員はいいかげんなことを言わん社員だと。あの会社なら信頼できる。そういうふうなこのことで、かえって知らんっちゅうことをはっきり言ったほうが、またそのことによって、ちゃんと調べて報告に行ったほうがですね、そのいいかげんなことを言うよりは、うんと信頼、信用を獲得できるっちゅうことにもなります。**

**これは人間は不完全ですから、いくらでもそういうこのあんまりはっきりわからんっちゅうこともあるはずなのでですね、無理して言う必要はない。かえってその不完全だということに基づくですね、この不確かさというものを表現したほうが、かえって人間的という、そういうこのこともあってですね、かえって信頼されるということにもなりますので、無理をする必要はない。だけど、やっぱりプロとして仕事をしていくためにはですね、いいかげんなことを言ってはならないので、ちゃんとしたことをお客さんにわかってもらうという努力をしなければならない。その意味で、現役で仕事をしてる間は、その自分の仕事に関わる学問との関わりというものを絶対に忘れてはならない。そして、常に知識も技術も、進歩、発展しますので、ひょっとしたら昨日の知識は、もう今日はうそになってるかもしれない。そういうこともあってですね、常にこの最先端のその知識や技術の進歩の、その状態と常にこう、自分が関わりを持ちながら仕事をしていく。そういう努力をし続ける必要があるわけですね。実際問題、発展、成長する会社というのは必ず研究所をつくりますし、また研究所を持っております。あるいは、研究所がなくってもですね、今、自分のやってる仕事との関わりのある大学の先生と常にコンタクトを取りながらですね、この仕事をしておったりですね、何かしらそういう学問的なこの世界との関わりというものを常に企業が忘れない。そのことが非常にこう社会的な信頼、信用を得るための大事な、これは条件になってくるわけですね。**

**だけど、多くの方々がその重要性を忘れてしまってですね、体験、経験だけの自信に基づく、この力で仕事をしてしまってるという場合が非常に多い。で、これが案外とですね、その消費者からすると、なんかもう一つ、頼りがいがないというふうな、そういうこの評価になってしまうことが多いんですね。とにかくまずは理性という観点から自信をつくっていこうと思ったならば、学問的知識との関連性を忘れてはならない。学問的知識を追求する、吸収する。そのことを忘れては、現実の社会における信頼、信用というものをより獲得していくという、そういうふうなことをすることができません。**

**次は感性という観点からですね、自信をつくるためにはどうするか。感性という観点から自信をつくるためにはどうするか。感性とは何か。感性というのは、これは人間だけが持っておるものではなくてですね、植物も感性を持っておりますし、動物も感性を持っておりますし、また単細胞生物でもですね、感性という、この感じる力というものを持って、自分が生きるために必要なものを感じ取りながら、それを捕獲し、あるいは獲得して生きるということに、なっておるわけですね。で、感性というのは、その意味では、生命の基本原理、命を生かす力というふうに、言うことができるわけなんですけども、人間においては、感性というのは、理性という能力を持つようになった、そういうこの命における感性のあり方をしておる。で、理性という能力を持つようになった命においては、感性というのは心といわれるような、そういうこの状態にまで進化してるわけですね。人間における感性は心である。**

**じゃあ、心とはなんなのか。心というのは、意味と価値を感じる感性である。心は意味と価値を感じる感性である。だから、人間はこの意味を感じないとやる気にならない。価値や値打ちや素晴らしさを感じないと、命は燃えてこない。命に火が付かない。それが人間の心というですね、高度な次元に進化した感性のこのあり方を示すもんなんですね。で、この意味と価値を感じる感性である心というものを原理にして、われわれが人生を生き抜く自信というものをつくろうと思ったらどうするかといったらですね、このまず感性から人生を生き抜く自信をつくろうと思ったら、自分の生き方を支える信念というものをつくらなければならない。自分の生き方を支える信念をつくる。信念を持つ、信念をつくるということは、これはどういうことなのかというと、違った言葉で言ったら、これが俺の哲学だというですね、いわゆるMy philosophy、これが俺の哲学だという、このMy philosophyを持つということは、この信念を持つということなんですね。**

**で、信念とはなんなのか。信念というものは、動揺しない自分のこの生き方の原理、動揺しない価値観。そういうものを信念というんですね。信念というのは、動揺してる間は信念ではない。ふらふらしておる間は信念ではない。信念というのは動じない。何があっても動じない。そういうものを持ったとき、信念が固まったと言うわけですよね。で、この動揺しない信念というのはですね、動揺しない信念というものはどうしたらできるのか。動揺しない信念というのはどうしたらできるのかといったら、心というものが意味と価値を感じる感性だから、自分がその意味や価値を感じる感性をどんどん成長させていってですね、もう俺はこのためにだったら死んでもいい。俺はこのために生きて、このために死ねたら、もう本望だ。何も言うことがないというふうなものに自分が到達したときです。これ以上の素晴らしいものはないというものに自分が到達したとき、信念が固まったというふうに言うわけであります。で、人間においては、死んでもいいと思えるものに出合わないと、本当の信念というものはできないんですよね。死んでもいいと思うものに出合う以前の信念は、まだ変わる可能性がある。まだ動じる、動揺する可能性がある。死んでもいいと思えるような、そういうこの価値観、あるいは生き方、あるいは対象、死んでもいいと思えるようなものに出合ったとき、初めてわれわれには、何があっても絶対、自分は変わらないというですね、そういうふうなこの自信というか、信念がこう生まれてくるわけであります。**

**とにかくこの人間における感性というのは、心というふうにいわれる。心とは意味と価値を感じる感性である。人間は最高に意味や価値を感じたならば、必ずこのためにだったら死んでもいい。そういうふうに思えるわけであります。これは恋愛なんかでもですね、恋愛なんかでも、恋愛が一番この盛り上がったときというのはですね、必ずその相手に対して、俺はもうこいつのためやったらなんでもしたる。俺はもうこいつのためやったら死んでもいい。そういうふうな思いがこう湧いてくるものなんですよね。女性の方でも、この人のためだったらもう命はいらん。そういうふうな、その思いが湧き上がってくる。それがこの恋愛においても最高に命が燃えた、そういうこの状況なんですよね。で、命というのは、この死んでもいいと思えるものと出合わないと本当には燃えません。燃えるということは、このために生きて、このために死ねたら本望だ。このためになら死んでもいい。そういうふうな価値を対象に対して感じたとき、命は燃え上がるんですね。そんな意味で、恋愛ではなくっても、仕事においてもですね、その仕事の持っておる本当の素晴らしさ、この仕事をせんことには、この醍醐味はつかめんぞというふうなですね、そういうこの仕事の魅力というものに自分が出合ったとき、人間はもうこの仕事のために俺は命を捨ててもいい。俺はこの仕事に命を懸けるんだ。そういうふうなですね、思いがこう湧き上がってくるということになるわけですね。**

**とにかく感性という観点から人生を生き抜く自信をつくる原理は、信念を確立する。信念をつかむ。信念をつかむためには何が大事なのかといったら、信念というものを自分が持って生きるためには、死んでもいいと思えるものを持たなければならない。仕事において信念を持とうと思ったならば、自分が今、やってる仕事の中に何かしら、このためにだったら死んでもいい。そういうふうな価値や素晴らしさを感じることができるものをその仕事の中に見いだす。そのとき、その人は信念を持ってその仕事をやっていく。本当にその仕事をすることに喜びを感じながらですね、この仕事のために生きて死ねたら本望だ。そういうふうなことが言える。そういうふうな状況にこの近づいていくことができるわけですね。で、どんな仕事でも、その仕事の醍醐味というか、素晴らしさというものをつかんだならば、われわれはどんな仕事をしておっても、その中に死んでもいいと思えるものを見いだすことができる。価値のない仕事はない。どんな仕事でも、それはたくさんの人に求められておる、要求されておるから、仕事として、商売として成り立っておるんですから、どんな仕事も価値のない仕事はない。**

**どの程度のこの意味や価値を感じながら、その人がその仕事をしてるかによってですね、その仕事に死ねるという、そういう気持ちになれるかどうかが決まるし、また、どの程度の価値や値打ちを感じながら、その仕事をしてるかによって、その仕事にどの程度、打ち込めるかというですね、その打ち込み方が違ってくるわけですね。ですから、プロでありながら、まだその仕事に死んでもいいと思うような気持ちになってないということは、まだその人はプロなんだけど、残念ながら、その仕事の本当の醍醐味をつかんでいない。この仕事をせんことには、この面白みはわからんぞというようなですね、そういう醍醐味をつかんでいないというふうに、言えるわけですね。その仕事が持っておる本当の素晴らしさにその人が目覚めたならば、必ずもう俺はこの仕事のためになら死んでもいいというふうな、そういう思いが湧いてくるわけであります。で、そういうこの思いを持った人間というのは、どういうことを言うかといったらですね、ほかにもいっぱい、いい仕事はあるかもしらん。ほかにもいっぱい、いい仕事はあるかもしらん。そやけど、俺にとってはこの仕事が最高ですとこう言うわけですね。それがその仕事の今、自分のやってる仕事の醍醐味をつかんだ、本当にプロといわれる人間の言葉であります。ほかにもいい仕事はいっぱいあるかもしらんけども、俺にとってはこれが最高やと。これ以上に自分が燃えることができるものはない。そういうふうなこう思いになったとき、その人は信念をつかんだ。そういうふうにこう言うことができるわけですね。で、これが感性という観点からですね、その人生を生き抜く自信というものを持った人間のすごさ、素晴らしさであります。**

**で、次は肉体という観点から自信をつくるためにはどうするか。肉体という観点から人生を生き抜く自信をつくるためにはどうするか。で、肉体というものが持っておる人生における価値はなんなのか。それは体験なの、体験。体験とはなんなのか。体験というのは、やった人間にしかわからない。やった人間にしかわからんというものを与えてくれる。病気になった人間にしか、病気とはなんなのか、病気になった人間の本当のつらさということはわからんし、失敗した人間にしか、失敗した人間の本当の気持ちはわからん。体験というのは、人間においては真実を語る原理なんですね。体験なしには真実は語れない。体験なしにも真理は語れますけど、体験がなかったならば真実は語れない。体験なしに本当のことはわからんのですよ。どんだけたくさん学問的知識を持っておってもですね、それは観念であって、単なる知識であって、やった人間にはかなわない。だから、本を読んでどんなにたくさんのことを知っておってもですね、行ってみたらこうやったんやとこう言われたらですね、行ってみたらこうやったんやと言われたら、その本を読んでどんなことを知っておっても、行ってみたらこうでしたと言われたら、ああ、そうやったんとこう認めるしかないのであってですね、行ってみたらこうやったんやとこう言われて、もうそやけどなとはこう、なかなか言い返せない。行ってみたらこうやったんやと言ったら、もう、ああ、そうやったんとこう認める以外にない。それほどに体験というものには有無を言わさない、理屈を超えた力があるわけですね。体験なしには真実は語れない。体験なくって真理は語れても、真実は語れない。体験は真実を語る力である。**

**だから、がんになった人間にしか、がんになった人間の本当の気持ちはわかってあげられないし、がんってどういうもんなのかは体験がなかったらわからん。罪を犯した人間にしか、罪を犯した人間の本当のつらさや、苦しさや、悲しさはわからない。罪を犯したことのない人間は、罪を犯した人間をついつい責めてしまう。だけど、罪を犯した人間も決して罪を犯そうと思って罪を犯したんじゃない。誰も罪なんか犯したくはない。だけども、罪を犯さざるを得ないような状況に何かしらの理由で追い込まれてしまって、心ならずも罪を犯すような人生になってしまう。そういうこの罪を犯した人間の苦しさとか、つらさとか、悲しさとか、耐え難いこのなんか、その屈辱感とかね、そういうふうなものは、これは本当に罪を犯してしまった人にしか、実感としてはわからないことなんですよね。体験しか真実を語る力はない。だけども、われわれは生まれてから今日まで、ずっといろんなことを体験してきてるんだ。人生は体験の連続なんだ。自分にはみんな、皆さん方にもですね、生まれてから今日まで、ほかの人間にはない、自分にしかない独特の体験をみんな積み重ねて、今日まで生きてきたはずなんだ。その体験の重みというものをですね、自分が本当にちゃんとこうつかんだならばですね、言いようのない、この自信が命から湧いてくるという、そういう状態に自分を持っていくことができます。**

**体験というのは、やった人間にしかわからんのだから、例え過去、勉強できなかったとしてもですね、勉強できないという人間にしか、勉強できない人間の本当の悲しさ、本当のつらさ、本当の苦しさというのはわかりませんよね。勉強が苦手やったという人も、それがまた体験であってですね、それを生かせば、その勉強できなかったという人間の本当のつらさをわかってあげることができて、その人を導いたり、その人の気持ちをわかってあげるような愛を持つことができる。とにかく体験なしには本当のことはわからない。体験というのは、やった人間にしかわからん。『ヤッターマン』ですね。やった人間、『ヤッターマン』。『ヤッターマン』にしかわからんという、そういう力をですね、自分に与えてくれるものが体験である。体験にはマイナスがないんですね。泥棒した人間にしか、泥棒した人間の本当の気持ちはわからんし、泥棒するっちゅうことはどんなことなのか、本当にはわからん。詐欺師になった人間にしか、詐欺師の本当の気持ちはわからん。人を殺した人間にしか、人を殺すということがどんなことなのかわからないはずだ。**

**だから、人を殺したようなことのないような小説家がですね、殺人事件なんて書くなんてちゃんちゃらおかしい。何がわかっとるんやっちゅうことになりますからね。じゃあ、人を殺さんと殺人事件、書けへんのかっちゅうたら、そういうことになってしまうと困りますからね、だから、小説家は殺人事件を犯して、そして、その牢獄に入っとる人にインタビューなんかしたりしてですね、で、いろいろ教えてもらってね、で、その実情を話で聞いて、そして、その気持ちを、理解して、そして、その殺人事件の小説を書くというような、そういうことを、やってるわけであります。だけど、自分にはその体験がなかったら、本当にはですね、その真に迫った描写というような、そういうこのすごみのある描き方というのは、多分できないんじゃないかと思うんですけどね。その意味で、本当に体験した人間にしか本当のことはわからん。だから、体験にはマイナスがない。どんな体験でもですね、例え人を殺す体験でも、体験の数だけ人間の幅は広がっていく。体験の数だけ人間は人間への理解を深め、広げていくことができる。体験の数だけ多くの人の気持ちがわかる人間に成長できるわけですね。**

**体験にはマイナスがない。だから、その意味では、人生には絶対、絶望はないんだ。どんなことがあってもですね、人生に絶望がない。体験の数だけ人間は成長する。体験の数だけ人間は人間への理解を広げ、深め、そして、この自分自身の人間性の豊かさ、人間性の深さ、そういうものをですね、つくることができるわけであります。とにかく大事なことは、俺には俺にしかない体験がいっぱいある。その体験をですね、自分自身がこの大事なものとして自覚し始めればですね、本当にこう、そのことによってどんだけたくさんのことを自分が体感として命で知ってるか。そのことを自分がこう積み上げていったならば、ものすごく大きな自信が本当に湧いてくるわけですね。失敗しても、それも体験だ。失敗することによって、そういう失敗をすることによって、そういう種類の失敗をした人間の気持ちがわかる人間に成長できた。それだけ自分自身は、自分以外の多くの人間の気持ちがわかる人間に成長できたんだ。そういうふうなことをこうちゃんと考えていったならば、非常にこの豊かな人間性が自分の中にはできてくるはずであります。だけども、この体験は自分にとってマイナスだというふうなことを考えたり、こんなこと恥ずかしいと思ってしまったら、そこからその人の自信は崩れるんですよね。体験にはマイナスがない。体験の数だけ人間は成長するんだ。どんなことでも全部、自分を成長させてくれるんだ。体験することによって、本当のことがわかるんだ。体験ほど人間にとって人生を生き抜くこの自信につながるものはない。どんなことがあっても全部大丈夫だ。どんなことがあっても全部これは自分にとって成長の糧になる。それがこの肉体というものを通してですね、人間が持つことができる自信の原理であります。体験にはマイナスがない。体験こそ真実を語る力であって、体験のない人間には本当のことはわからんと。人生、何があっても大丈夫。**

**だから、言ってみれば、結婚だけして離婚してない人間は、人生の半分しか知らん。というようなことを言ったら、みんな離婚せないかんのかということになってしまいますけど、そういうわけじゃなくって、離婚しても大丈夫。それも体験だ。だけども、原理から言うと、離婚というのはやっぱり自分の決断からの逃げですからね。決断ということからすれば、離婚はこの自分を裏切る行為であってですね、ある意味では、マイナスの要因になるんですけども、だけども、離婚もまた体験である。離婚することによって、また離婚した人間の本当の気持ちがわかってあげられるという自分に成長できた。そういうふうに考えれば、離婚もまた決して、この自分が駄目になる、そういうこの原因にはならない。またそれも成長だというふうに、こう言うこともできる。とにかく物事にはどんな物事にでもですね、マイナス面とプラス面があるので、あらゆる事柄をですね、どんなことがあっても、決して絶望したらいかん。どんなことがあっても、必ずそれを自分のこれからの人生のプラスにしていく。そういうふうに考えていかないと、人生の自信を積み重ねていくことはできません。**

**どんな体験もすべてマイナス面とプラス面がある。あらゆる体験、あらゆる事柄を自分にプラスになるように解釈していく力、これがこの崩れようのない幸せというものをですね、自分がこの持つことができる基本原理であります。あらゆる体験を自分のプラスになるように解釈していく。体験にはマイナスがないんだ。そのことによって、自分はどう成長できるのか。それを考えればですね、人生にはこの崩れようのない幸せというものが生まれてくるんですね。だけど、これは自分にとってマイナスやと思ったら、その瞬間からその人の人生は崩れ始める。そのことによって自分が成長していくという、そういう意識を持ったとき、体験はすべてプラスになってくるわけですね。とにかく体験ということからするならばですね、この人生には失敗の人生はない。このアサヒグローバルというこの会社に就職した。この会社で仕事をしてるということは、この会社に勤めなければ体験できないようなことが、体験させてもらったわけなんですから、これも自分の人生においてはかけがえのない、この体験の積み重ねであって、この仕事をしなければわからないことがいっぱい諸君にはわかってるはずですよね。この仕事をさせてもらうことによって自分がどんだけ成長できたか。学生時代の自分と今日の自分と比べたらですね、ものすごく大きな成長があるはずなんですよね。それをちゃんと自分の中で自覚的に積み重ねていったならばですね、毎日毎日、とにかくは、この自分が成長できてるという自信が自分に湧いてくるはずなんですね。**

**とにかく自分は体験の連続なんですからね。毎日毎日がその意味では成長の連続なんですよ。体験にはマイナスがないから、朝起きたら、また今日も体験しちゃう。また今日も成長しちゃう。もうどこまで成長するかわからん。困っちゃうなっちゅうぐらい成長しちゃうというね、それがこの本当の人生なんだ。人生は体験の連続ですから、毎日毎日が成長の連続なんですよ。肉体という観点から言えば。肉体こそ、この神にはない、人間が持っておる最も重要なこれは原理ですからね。われわれは肉体を通して自信をつかむという、この力をですね、この人間的自信の核になるものとして忘れてはならない。とにかく体験こそ真実を語る力。体験なしには、真実は語れない。その体験を人間である限り、おぎゃあと生まれた瞬間から今日まで、毎日毎日、積み重ねてきてるんだ。どれだけの真実を語る力が自分のものになったか。本当にこう数えられないぐらいの自信をですね、みんな与えられてるはずなんですよね。でも、それを自分の自信にしていこうという意識がないと、このいろんな体験がかえって自分の弱さをつくるようなね、ことになってしまったりする。劣等感とか、挫折感とか。だけど、それも全部プラスなんだ。それも全部、それを体験したことによって、その本当のことがわかったんだ。そのことによって、多くの同類のそういう体験をした人間の本当の気持ちをわかってあげられる自分に成長したんだ。それだけ全部、自分の成長になってるんだ。そういうふうに考えていったならばですね、本当に毎日毎日、そういう自信の積み重ねという、そういう状態になってるんですね。**

**とにかく人間的自信というのはですね、この３つの原理によって成り立っております。理性という観点からは知識、感性という観点からは信念、肉体という観点からは体験ですね。この知識と信念と体験、この３つがですね、人間的自信というものを積み重ねていくためのですね、重要なこれは基本原理です。知識を積み重ね、そして、この信念というものを確かなものにしていく。死んでもいいと思えるような、そういう意味や価値を感じるところまでですね、この今、自分のやってる指標において、本当にその仕事がどれほどの素晴らしいものなのかっちゅうことをね、とことん追求していく。そして、この体験、毎日毎日の体験、これほどかけがえのない、素晴らしい自信の原理はないんだ。やった人間にしかわからん、真実を語る力。この３つのものを自分の中で本当にちゃんと組み合わせていったならばですね、どんな人でもですね、その毎日毎日が成長だと言える、ものすごく大きな自信を獲得することができます。とにかく知識は増えるんだ。信念もどんどん、どんどん、固まっていくんだ。体験もどんどん積み重ねられていくんだ。減らないんだ。だから、自信、毎日毎日、自信に結び付いていくんだ。そういう自信をつくる基本原理をですね、ちゃんとわかったならば、われわれは人生を恐れることはない。**

**毎日毎日が自信をつくる連続なんだ。ぜひそういうこともね、考えてもらって、不完全なる人間でも、毎日毎日、自信をつくり続けるという、そういう人生になっていく。そういう人生を生きる。そういうことができると。自信がなかったら、何もしたらいかんちゅうんじゃなくって、人生というのはまさに自信を積み重ねていくプロセスなんですよね。毎日毎日が自信なんだ。毎日毎日が自信を積み重ねていくんだ。自信には絶対に崩れることはない、そういうこの原理がある。それが知識と信念と体験である。この崩れようのない自信の原理というものをちゃんとつかんだならばですね、本当にわれわれは自分の成長というものを、自分自身でちゃんとこう意識しながら、人生を生きることができます。だけど、自信だけでは自信過剰になってですね、傲慢さが出てくる。人間においては傲慢さほど恐ろしいものはない。多くの社会的地位を獲得した人間が失脚するのはすべて傲慢さ故なんですね。傲慢な態度で社員に接する。傲慢な態度で仲間に接する。傲慢な態度でいろんな人に接する。そのことがですね、結果として内部告発を誘発して、あんなやつなんかって、こう思われてしまってですね、で、その内部告発を誘発して、いろんなスキャンダルを暴かれてしまって、地位から引きずり下ろされてしまう。傲慢さほど人間にとって恐ろしいものはない。それが故に、自信だけでは人生を生きられません。自信だけでは生きられないんだ。**

**じゃあ、もう１つ、何が必要なのか。それは謙虚さだ。自信と謙虚さが一対のもんとなって初めて不完全なる人間における生きる力になるんですね。自信だけでは生きる力にならん。自信と謙虚さが一対のものとなって初めて現実を生きる力になります。ですから、この人生の鉄則の第１番目は、自信と謙虚さをつくるという、そういうこの原理になってるわけですね。じゃあ、謙虚さをつくるためにはどうしたらよいのか。謙虚さをつくろうと思ったならば、まずは人間は不完全だということをですね、本当にちゃんとこう知らなければならないと。不完全ということはどういうことなのか。人間が不完全ということはどういうことなのかといったら、人間はどんな人間でも、長所、短所が半分ずつある。これが人間が不完全ということの意味なんですね。で、多くの人は、不完全っちゅうことがわかっておってもですね、短所は半分もないよなと。ちょっとはあるかもしらんけども、その駄目なところはちょっとあるかもしらんけど、半分もないよなと思ってしまってる方も多いと思うんですけど。それがまたですね、その傲慢さの原因にもなってくるのでね、人間にはどんな人間でも駄目なところ、他人から嫌がられるところ、他人から批判されるところ、半分もある。それが人間のこの逃れることのない宿命なんだ。**

**人間はどんな人間でも、長所半分、短所半分。他人から好かれるところも半分あるけど、他人から嫌われるところも半分もあるんだ。どんな立派な人間でもね、長くその人と付き合っておったら、必ず結果としては、どんな立派な人でも嫌だなと思うところが半分は出てくる。だから、社会的にどんなにですね、尊敬されてる人でもですね、その奥さんに聞いたらですね、いろんなことを、いろんな駄目なところを言ってきてですね、結局、普通の人になってしまう。社会的には立派な人でも、家の中に入ったら普通の人間なんですね。身近におるとですね、その本当に嫌なところが半分は出てくる。だから、どんな人と付き合う場合でもですね、必ず自分の嫌なところは半分持っておるんだ。しかも、短所が半分あることは、これ、なくならないのであってですね、短所がなくなったら人間じゃないんだ。どんな人でも必ず嫌なところが半分ある。また相手から見たら、自分の中にも嫌なところが半分ある。相手から見たら、自分の中にも、能力においても駄目なところが半分ある。また人間性においても駄目なところが半分ある。あらゆる意味で人間は短所が半分ある。短所っちゅうのは、他人から嫌われるところ、他人からばかにされるところ、他人から軽蔑されるところ、それが半分もあるんですよ。人間には、どんな人間でも。そのことがちゃんとわかったならば、決して傲慢にはなれない。そういうこの謙虚さがこうにじみ出てくるんですね。**

**だけども、他人から見たら、自分の中に嫌がられるところ、軽蔑されるところ、批判されるところ、そういうものが半分もあるということをですね、みんなわかってないから、ついついこの傲慢になってしまってですね、自分の考えを相手に押し付けようとしたり、自分と違う考えに出合うとむかっときたり、そういうふうなこのことになってしまったり、他人から批判されると、その批判してきた人間に対してむかついてしまったりですね。ということになってしまうんだけど、自分の中に半分も嫌がるところがあるんやと。能力においても半分も軽蔑されるところがあるんや。人間性においても、半分も嫌がるところがあるんや。そのことを本当にわかったならばですね、その相手から批判されても、相手から非難されても、それは致し方がないというね、そういう気持ちで、その自分が受け止めることができるし、またそういうふうに対応してくる人間を許すことができる。そうするとですね、批判したのに、あんまりそいつがこたえてないような、そういう状態でですね、当然やというような、そういうこの受け止め方をしてると、かえって批判した人間が、その自分が批判した相手の態度によって、そいつを尊敬するようなね、なんてすごいやつなんやろうと思ってですね、その相手を見直すような、そういう状況になってくるようなこともあるんですね。**

**とにかくは、人間はどんな人間でも、長所、短所、半分ずつある。このことをですね、ちゃんとわきまえるならば、絶対に傲慢にはなれない。で、相手から非難されても、いや、本当に申し訳ないと。俺にはそういうところがあるんや。なんとかそういうところをなくそうと思うんやけど、なかなかなくならへん。申し訳ないと、許してくれと言って。で、俺の駄目なところは、ぜひ助けてもらいたいと言ってですね、そして、その相手に助けを乞うような、そういうこの柔軟な、柔らかなですね、しなやかな感性を持ってですね、相手に接すれば、批判してきた人間が、かえってその人を尊敬するようなね、そういうふうな逆転現象もこう生じてくるんですよね。それを批判してくるとむかついて、おまえこそこうやないかと、こう言ってしまうと、これは対立してしまって、けんかになってしまうんですよね。そういうこの人間性が持っておるですね、この微妙なそういうこう心理的な反応というかですね、そういうものを理解したなら、もっともっとわれわれは素晴らしい人生を生きることができるし、もっともっと自分が楽な生き方ができる。批判されても、否定されても、軽蔑されても、いや、申し訳ないって言うとったらですね、あんまり問題なくなってしまうんですよね。**

**本当にそこのところは、俺、駄目なんやと。そうやって助けてくれへんかっちゅうてですね、かえって助けてもらっちゃったりなんかすると、助けてもらうっちゅうことは、相手の能力を称えることになりますのでね、相手の能力を生かす活人力になるわけですね。自分の駄目なところを相手に助けてもらって、ありがとう、君すごいね。俺はそこのところ、本当に駄目なんやっちゅうてですね、助けてもらっておいて、相手の能力を褒めたたえる。そしたら、ものすごい、いい人間関係ができてしまうんですよね。そういう謙虚さがまたこの素晴らしい生き方をですね、つくり出してくるわけであります。自分の短所を素直に認めて、いや、申し訳ないと。本当に俺はそこ駄目なんやと、それを認めてしまったら、けんかにならんですしね。だから、短所を認めるだけでは、これは人間としては駄目なので、何か一つぐらいはですね、長所を磨いて、人の役に立てるというね、さすがやねと言ってもらえるようなものを持っとらんないかんと。そのために自信をつくるということは大事なんですけども、だけども、その反面、とにかくはですね、短所が半分もある。だから、もっともっとわれわれは謙虚になって、謝って、素直に自分の駄目なところを認めるというね、そういう気持ちが必要なんですよね。**

**それがこのにじみ出てくる謙虚さ、不完全性の自覚からにじみ出てくる謙虚さ。これはなかなか口で言うほどたやすくできない、皆ね。ついつい、この軽蔑されたり、批判されたり、注意されたりなんかするとこう、むかっときてね、嫌やなという感じになってしまう。だけども、駄目なところはどんな人でもあるのでね、いや、本当に申し訳ありませんと。本当このところは自分の駄目なところです。そやけども、このいいところをもっと磨いて、役に立つような、そういう生き方をしたいと。駄目なところは助けてくださいと言ってですね、素直にその助けてもらうような、そういう力をですね、このつくっていく。これが謙虚さなんですよね。助けてもらって、感謝をして、そして、君はすごいねと言って相手を褒める。これが短所というものが持っておるですね、この短所の人間的な生かし方であって、そっからこの謙虚な生き方、謙虚な人間性というのが出てくるわけですね。短所は認めたほうが、かえって相手から尊敬されたり、何かしらこう、好感を持って迎えてもらったりすることができる。批判されたときにむかつかないほうがいい。それを素直に認めてですね、そして、この駄目なところはあるけど、こういういいところもあるというね、そういう形でその人の役に立とうとする。またそういうこの駄目なところを補うために、自分の長所を磨いて、そして、この人の役に立つことができるような自分をつくる。そういうふうな、この努力をすることによってですね、この自信と謙虚さが両方とも身に付くような、そういう状態になることができるわけですね。**

**とにかくは、人間はどんな人間でも長所、短所、半分ずつあるんだ。なんでそういうふうに考えなきゃならんかっちゅうことは、もうこれまで何回もお話をしてきましたから、何回も話を聞いていただいてる方は、もう言わないでもわかっていただいていると思うんですけど、とにかく人間もこの宇宙の中に存在する宇宙人だ。だから、われわれも宇宙の摂理から外れることはできないと。宇宙の摂理とはなんなのかといったら、宇宙の摂理というのは、マイナスに評価されるエネルギーとプラスに評価されるエネルギーが、エネルギーバランスを模索しながら、宇宙の秩序をつくってる。これが宇宙の摂理といわれる現象である。だから、宇宙の中に存在するものの基本的なあり方は、バランス作用、調和作用、平衡作用というね、こういうバランスを取る働きが宇宙の中に存在する、あらゆるものの基本的な原理だ。そして、この宇宙に存在するものは、必ずこの対という、一対という、対という構造を成しておって、光には影があり、表には裏があり、善には悪があり、美には醜があり、真には偽があり、静には濁があり、上には下、右には左、前には後ろ、そういう形で必ず一対という、対という構造でですね、あらゆるものは成り立っておる。表だけのものはない。必ず表があったら裏があるのが存在の基本原理だ。**

**だから人間も宇宙の中に存在するものであって、人間も宇宙の摂理によってつくり出されたものだから、人間性にもやっぱり、この長所半分、短所半分、そういう構造で成り立っておるんだ。いいところが半分、悪いところが半分、これは絶対、どんな人間でも抜け出せない、そこから逃れることのできない基本原理だ。自分にも駄目なところが必ず半分ある。他人から嫌がられるところが半分ある。他人から軽蔑されるところが半分ある。これはどうしようもないんだ。だから、それを指摘されても、むかついたらいかんというかですね、そんなことはないと言うたらいかん。その通りですと、こう言わないかん。ついついうっかりね、やっぱりこう、会社なんかでも、いろいろ仕事上のミスが続いたりなんかすると、その短所を指摘されて、その短所をなくさせるような、そういう状態にこう、この努力するように言われるんですけども、もちろん、全然努力せんでもいいっちゅうわけじゃないですけども、とにかくは、その短所を指摘されるのは長所が伸びてないからなんですよ。長所が伸びてくるとね、短所っちゅうのはあんまり言われなくなってくるしね、短所っちゅうのはあんまり気にされなくなってきてね、かえってその短所が面白み、あるいは親しみを感じさせる。そういうふうになってくるわけなんですね。**

**だから、もっともっと長所を伸ばして、自信のあるですね、この仕事の仕方ができる。そういう状態になってくれば、短所はあまり気にされなくなってくる。短所が指摘されるのは長所が伸びてないからだ。そういうふうなこの長所、短所のバランスの問題があるんですよね。短所をなくそうとすると、長所が伸びないから、ますます駄目になってしまう。短所をなくす努力をするよりは、長所を伸ばす努力をしなければならない。長所を伸ばしていったら、短所はあまり言われなくなってくる。で、その素晴らしい能力のところで、その素晴らしい長所のところで使ってもらえる。そういうふうなですね、状況になってくる。そのためにも、自分の長所を他人から一目置かれるようなところまで伸ばしていくという努力をいっときも早くせんといかん。人生を生きる、人生を楽しく、面白く、愉快に生きる基本原理は、一刻も早く、１年でも早く、１日でも早く他人に一目置かれる能力をつくることなんですよね。他人にばかにされない。他人から一目置いてもらえるような能力を早くつくること。それができたら、あらゆる短所は許されてしまう。**

**そして、その自分の優れた能力のあるところで使ってもらえるというですね、そういう状態になってくるわけであります。これから個性の時代ですから、そういう個性的な優れた能力を持てば、その能力故にですね、評価され、その能力に金が払われてですね、その他の人よりも高い給料がもらえる。もうそういうスペシャリストにならないといけないんですよね。他人によって置き換えが利くようなですね、そういうこの平凡な人間であったのでは、この存在価値はない。だから、ついつい批判されてしまう。ついつい駄目なところばっかり言われてしまう。だけども、素晴らしい他人から一目置かれるようなですね、能力がちゃんとできてくれば、必ずその長所故に短所は人間の味に変わってきて、そして、味に変わるっちゅうことは、短所があまり気にされなくなってきてしまってですね、そして、この長所のところで仕事ができて、長所のところで金を払ってもらえて、そして、自分の得意な分野で働かしてもらえる。そういうふうな状況になってきて、生き方が楽になってくるわけですね。**

**とにかくこの謙虚さというものをつくるためには、人間には長所、短所、半分ずつある。他人から見たら嫌なところは半分あるんだ。だから、もっともっとこのわれわれは謝らなければならないというか、駄目なところがあるということをですね、決して言われたときに腹を立ててはならないと。その反対にこの長所を伸ばしていって、他人から一目置かれる自分というものを早くつくるという、そういうこの生き方をしないといけない。それが個性の時代のですね、生き方であり、また個性の時代の仕事の仕方である。で、謙虚さをつくる原理っていうのもいろいろあるんですけど、まずは、とにかくは、その不完全制の自覚からにじみ出る謙虚さというものをまずですね、自分のものにしておくということが非常に大事なことである。**

**２番目は、理性の使い方の問題なんですけども、理性もまた不完全だっちゅうことをですね、ちゃんと知ってないといかん。どんなに自分が正しいと思っても、それは決して完全ではない。絶対ではない。自分と違った考えに出合ったならば、理性も不完全なんだから、だからどんなに自分の考えが正しいと思っても、それを傲慢に押し通してはならないと。必ず違った考えから何かを学んで、自分の考えを成長させていく。あるいは、自分の考えを広げていく。そういうふうなですね、この対応をしなければならない。これも毎回ですね、いろんな形で申し上げてることですけど、理性という能力は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力である。これまで人類は、理性は合理的に考えることができる素晴らしい能力だと思ってきました。であるが故に理性信仰に陥ってですね、そして、この理性的に傲慢になり過ぎてしまっておった。だけども、理性というものは、決してそんなこの傲慢に主張することができるようなものではなくって、理性というものは合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力なんだ。理性は人間しか持ってない。だから、人間的な能力なんだ。人間的っちゅうことは、不完全な能力なんだ。どんなに自分が正しいと思っても、それは決して完全ではない。不完全なんだ。だから、自分と違った考えに出合った場合には、相手から何かを学んで、自分の考えをより高度に成長させていく。そういうふうなですね、気持ちにならなければならない。これがなかなか今の人たちには、まだできないことなんですよね。**

**人から学んで自分の考えを成長させていく。あるいは、こんなやつからはなんにも学ぶものはないと思ったらですね、こういう人もおって人間なんだ。こういう人と付き合っていくためにはどうしたらいいんだろう。そういうふうに考えて、自分の人間性の幅をつくっていく。そういうふうなことをね、しなければならない。相手から学ぶものがあったなら学んで、自分の考えを成長させて、君と出会えたから僕はこんなに成長できました。ありがとうっちゅうて、相手に感謝する。相手からなんにも学ぶものがないと思ったら、こういうやつもおって人間なんだ。そのことを認めることがですね、人間の現実を認めることであって、こんなやつはおったらいかんと思ったら、その人は現実を否定しておることになってしまいますから、現実が見えなくなってくる。人間にはいろんな人がおるんだ。こんな信じられないようなやつもおって人間なんや。こういうやつと一緒に生きていこうと思ったらどうしたらええのか。それを考えていくことによって、自分の人間性の幅が広がってくる。人間性の豊かさができてくる。そういう人の存在をも認めて許すことができるような大きさのある人間になっていく。そういうふうな成長の仕方もあるわけですね。**

**相手から学んで成長していくか。あるいは、相手を受け入れてですね、現実を否定しないで、相手を受け入れて、そういう人と共に生きていこうと思ったらどうしたらよいのかということで、自分の人間性の幅をつくっていく。これも謙虚さをつくる大事な方法論なんですよね。現実には、精神に病を持った方もいらっしゃる。また現実には、体の不自由な方もいらっしゃる。また現実には、痴呆の方もいらっしゃる。だけど、現実を生きるっちゅうことは、そういう人と共に生きていかなければならないんだ。それを嫌っておったのでは、人間というものをですね、本当にこの知ることにならない。うっかりしたら、自分も年を取って痴呆になるかもしれない。いつ自分が大きな事故でですね、体の不自由な人間になるかもしれない。いつまた精神の病を得てしまうことになるかもしれない。とにかくすべてそれは人間の可能性として否定できないことなんだ。そういうこの信じられないような人もおるのもですね、現実なので、そういう人とも共に生きていく力をつくっていかなければですね、自分の人間性を成長させることはできません。**

**そういう意味で、どんなに自分が正しいと思ってもですね、決して自分の考えだけが正しいんじゃない。個性の時代なんだから、いろんな考えがあっていいんだ。お互いに相手から学びながら成長していく。そういうことをですね、ちゃんとこうできないことには、個性の時代という、お互いに違いを認め合って、許し合って生きていくという個性の時代を生きることはできない。またそれができなければ、夫婦生活もけんかのしどおしで、決して楽しくはない。幸せではない。お互いに違いを認め合って、許し合って、学び合って、教え合っていく力をつくっていかないと、夫婦関係も、親子関係も、両親との関係も、また会社におけるいろんな人との関係もうまくいかなくて、自分が不幸になってしまう。また相手も不幸にしてしまう。それが今の時代のですね、この個性の時代の現状であります。自分と違うものを許せないという、そういうこの古い時代の、画一性の時代の、理性の時代の、そういうこの考えを引きずってしまっとるが故に、今、離婚の激増、幼児の虐待、あるいは違いを理由に戦争をして殺し合う。そういう状況になってしまってるわけですね。**

**早く個性の時代を生きる原理、すなわち理性も不完全だ。どんなに正しいと思っても、決してそれは完全ではない。個性の時代なんだから、いろんな考え方もあってもいい。幼稚な考え方もあってもいい。高度な考え方もあってもいい。低いレベルの考え方もあってもいい。それが許せて初めてわれわれは人間として現実を生きることができる。そんな幼稚な考え方しとったらいかん。本当の考え方はこうやと言ったら、画一性を図ることになりますからね、みんなが同じやないといかんちゅうことになってきますから、現実的には幼稚な考え方をする人もおっていいんですよ。またものすごい低レベルなね、考え方をする人もおっていいんですよ。それが許せなければ人間ではない。みんな高度な考え方にならないかんちゅうたら、これは画一化を図ることになりますからね。いろんなレベルの考え方がある。それが現実なんだ。それが許せなければ、現実が見えなくなってしまうし、現実がゆがんでしまう。低い考え方の人にはどういうふうに対応したらよいのか。それが自分の人間性の幅をつくることになってくる。**

**お客さんでも、いろんな教養レベルの方がいらっしゃいますからね、自分の持ってる教養レベルに合わなかったら、お客さんをばかにしたり、なんか批判的な目で見たり、責めるような目で見たり、見下すような目で見たんでは、商売できませんからね。どういう人もあっていいんだ。その人に合わせて、自分の人間性の幅を広げていくという、そういうこの人間性の豊かな、そういうこの人にならないと商売は発展しませんし、またこの自分の周りに嫌な人が増えてくれば、自分は不幸ですからね。どんな人をも認めて生きていける。そのことで自分も幸せになり、相手も不幸にしないという、そういう生き方ができてくるわけですよね。そういう意味で、もっともっとわれわれは、理性的に謙虚にならなければならない。自分と違う考え方を認めて許す。自分よりも低い考え方の人間をも認めて許すことができる。自分よりも高い考え方の人間をもちゃんと認めて許すことができる。いろんなものを認めて許すことができる。それが現実を肯定する、現実を知る、そういうことになってきてですね、結果として人間性の幅ができてくる。器が大きくなってくる。度量が大きくなってくる。包容力が大きくなってくる。そして、いろんな人を統率していける。統率力ができてくる。そういうことになってくるわけですよね。それが謙虚さというものが、この生かされた姿だ。謙虚にならなければ、包容はできない。謙虚にならなければ、器が大きくならない。どんな人をもばかにしない。どんな人をも尊敬できる。認めることができる。そういう人間性をですね、つくっていかないと、この個性の時代というものはですね、やっていけません。**

**謙虚さというものをつくっていく、この最後の３つ目のね、基本原理はですね、これは人間というのは、他の命を奪い取ることなしには自分の命が保てないという、そういう存在である。われわれは、自分が生きていくために、心ならずもというかですね、生きていくための必要として、ウシを殺し、ブタを殺し、ウマを殺し、イノシシを殺して、いろんな動物の肉を食わなければならない。また、自分が生きていくために、ダイコンさんや、ニンジンさんや、ゴボウさんやね、ホウレンソウさん、みんなこう引き抜いてきて食べんないかん。人間は他の命を奪い取ることなしには、自分の命が保てない。これは人間だけではない。すべての生物は他の命を奪い取ることによって、自分の命を保っていくという、そういう関わりのもとで生きざるを得ない。もうそれが共生ということである。共生ということは、仲よく生きるんじゃなくって、共生というのは、他の命を奪い取ることなしには自分の命を保てない。だから、自分が生きていくためには、自分が食うものを絶滅させたらいかん。残しておかないかん。それが共生という関係性なんですね。**

**だけど、人間以外の動植物はですね、自分が生きていくためには、他の命を奪い取らなければならないっちゅうことを知らない。だけど、人間は、自分が生きるためには他の命を奪い取らなければ、自分の命は保てないということを知ることができる。それが人間の特徴である。であるが故に、人間はその人間しかできない、そのことをですね、ちゃんと表現して生きないと、人間的に生きてるとは言えないと。その意味で、われわれは他の命を奪い取ることなしには自分の命を保てない。だから、自分が生きるために犠牲になってくれておる、ウシさんや、ウマさんや、ブタさんや、あるいはニンジンさんや、ダイコンさんや、ゴボウさんに対してですね、本当に申し訳ないと。だけど、そうせんことには生きていけへんのやと。そういう思いをですね、持って、そういうものに対さなければならない。だから、食事をする場合には、まず自分の命のために犠牲になってくれておる他の命に対して感謝をして、いただかせてもらわないかんと。**

**だけど、今のこの社会の勧奨ではですね、人間が感謝するのは、自分のために犠牲になってくれてる命じゃない。人間が感謝するのは、神様、仏様なんだ。神様、仏様にですね、いただきますなんていうようなことを言ってですね、キリスト教であれば、アーメンなんていうようことを言って、で、その神に感謝して、そして、その神から与えられたものだからっちゅうんで、この食ってしまうというですね、そういうふうなこの食い方をしてる。また、仏教なんかでも、いただきますっちゅうのは、仏様に感謝して、そして、このいただいてるのであって、生きとし生ける命そのものに感謝していただいてるんじゃない。だから、決して生命に対する畏敬の念、命に対する尊厳性というような、そういうものは子どもたちの心に養われない。神や仏には感謝するけども、その命に対する感謝という精神がまったくできてこない。だけど、本当は、われわれは、自分の命のために犠牲になってくれておる他の命に対して、本当に申し訳ないと。だけど、いただかせてもらわんことには生きていけへんねやと。そういうこの切実な思いをですね、持ちながら、それを食べさせてもらうということをしなければならない。だから、われわれは、まずはですね、食事をする場合に、自分のために犠牲になってくれてる命に対してですね、いただかせていただきますっちゅうて食べるという、そういうことをせんといかんと。神様、仏様はもう４番目か、５番でもいいんですよね。まずは、その自分のために犠牲になってくれた命に対して感謝せないかん。**

**そして、その次には、その食べるものをつくってくれてる、第一次産業の、生産者の方に対して感謝せんないかん。３番目は、食事をつくってくれてるお母さんや、あるいは、食堂のこの料理人の方々に感謝せんないかん。神様、仏様は、その次ぐらいでいいと。おるかおらんかわからんようなやつに感謝してどうするんやと。目の前におる、本当にこの**

**直接に自分の命のために犠牲になってくれてる、その人たちに感謝せんことにはですね、本当には命に対する尊厳性、本当の命に対する畏敬の念なんて養われるはずはない。これもやっぱり、人間が基本的に持っていなければならない、命における謙虚さの基本原理なんですよね。とにかくこの３つがですね、謙虚さというものをつくっていくための基本原理です。人間、どんな人間でも長所半分、短所半分。理性というのは、合理的にしか考えることができない有限で不完全な能力である。自分がどんなに正しいと思っても、決して完全ではない。絶対ではない。だから、他から学んで成長させなければならない。そして、われわれは生きるためには、他の命を奪い取らなければならない。自分の命が、ダイコンさんやゴボウさんみたいに引っこ抜かれてですよ、他の生物に食べられてしまったら、どんなに痛いか、つらいかね、どんなに苦しいか。それをわかったならばですね、われわれは自分がそうしてる相手に対する、その痛みや悲しさや苦しさがわかるはずだと。同じ命なんや。命としては同じなんやと。自分がそういうふうにされたら、どんなにこのつらいかということをね、考えてみたら、どうせないかんのかがわかる。**

**そういうふうにしてですね、この人間としての謙虚さというものをこう身に付けていく。人間は不完全ということは、観念ではわかっておっても、なかなか行動においてですね、それを示すことができないでいるのがですね、この現在の段階であります。今はまだ人間の本質は理性だと考えておって、心ではない。理性だと考えてしまってる人がまだまだ多い。だから、この自分と違った考えに出合ってしまうと、なんか対立的になってですね、むかついてしまう。それはまだまだ理性こそ、この信頼できるものであってですね、人間の持ってる能力の中で理性しか信頼できない。理性は神から人間に与えられたもんだ。そういうふうなこの思いで生きてる人がまだまだ本当に多いんですよね。だから、理性的に考え方が違ったりすると対立をする。だけど、本当に人間が不完全だということを本当にちゃんと命でわかったら、われわれもっともっと、この寛大な、あるいは豊かな、優しい生き方ができてくることになるはずなんですよね。そのためにこの謙虚さをつくる３つの原理というものをね、ぜひ知っておいてもらいたいと。こういうふうにして、自信と謙虚さというものをものにしていく。そのことによって、われわれはこの個性の時代である社会を生き抜く力というものをね、まず基本的にものにすることができるわけであります。**

**だけど、現実的にこの今の時代の社会を生きる基本原理、この個性の時代の中でですね、自己実現という、本当に自分らしい人生をつくっていくということをするためには、あと４つの重要な原理があります。それはこれからちょっと10分間ほど休憩を入れて、後半の部分であとの４つをお話しします。だけど、まずはこの自信と謙虚さをつくるっちゅうことが、何にもましてですね、人間としては非常に大事な第１原理であるということで、時間をかけて話させてもらいました。ちょっと10分間、休憩を入れます。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、後半のお話をさせていただきます。まず、この人生の鉄則の第１番目、自信と謙虚さということについてお話をしました。で、その次はどういう原理なのかと申しますと、この次はですね、この自己実現の人生、自分のこの個性を実現し抜いていくようなですね、そういうこの自己実現の人生というものを生きていこうと思ったならば、２番目に大事なことは自分で自分を教育するという、そういう課題なんですね。で、この受け身的に人に教育されておるあいだは、それは自分の気に入った自分ではない。それは他人によってつくられてしまったですね、この自分であって、本当の自分ではない。自分で自分を教育するっちゅうことは、自分が成長していくためには、自分を成長させるためには、この本を読まんないかん。この話を聞かんないかん。この人に会わんないかん。この仕事をせんないかん。そういうふうに自分から積極的にですね、自分に必要なものを自ら選択して、選び取って、そしてこの吸収していくということが、自分で自分を教育するということなんですよね。**

**ところが、多くの場合、この教育というのは、お仕着せで、自分はそれを別に必要としてるわけじゃないんだけども、勉強させられてしまって、身に付けさせられてしまうというふうな、そういう状態でですね、教育されてしまってるという、そういう場合が多い。であるが故に、なかなか個性ある自分というのは出てこないんですよね。ですから、もっともっとわれわれは、この自分自身を成長させていくために何が必要なのか。そのことを自分がこう考えてですね、本当に自分の読みたい本を読む。自分に必要な本を買ってきて読む。そして、自分に必要な話を聞きに行く。そういうふうな、もっともっと積極的なですね、この生き方というものを身に付けていかないと、本当に自分らしい自分、自分の好きな自分というのはなかなかできてこないし、つくれません。**

**そういう自分で自分を教育していくということのために必要な事柄が３つあります。まず第１番目は、理想を持って生きる。で、これは自分の人生の未来にですね、俺はこうなりたい、こうしたい。そういうふうなこの命から湧いてくる欲求としての理想を持つことですね。これは前回、申し上げたことですけど、頭で理想を考えたら、頭で人生の目的を考えたら、人間は頭で考えた理想、目的に縛られてしまって、堅苦しい、窮屈な、つらい、苦しい人生を生きてしまう。本当に自己実現の人生というものをですね、この命を喜ばせながら生きようと思ったら、欲求を実現しなければならない。だから、命から湧いてくる欲求としての理想を持つこと。俺はこんな人間になりたい。俺はこんな仕事がしてみたい。俺は将来、こんな生活がしたい。そのためには、今、どうしたらいいのか。そういうふうに考えてですね、欲求を実現していくという形で、この理想というものを持って生きるということをしなければならない。理想は欲求として持たなければ価値がない。欲求なしに頭で考えた理想は自分を苦しめる。**

**人間の最高に幸せはしたいことをすることだ。だが、ただ、したいことをするのは野獣だ。人間は欲求として理想を持つこと、理想を欲求として持つことによって、初めて人間的な人生が始まる。理想というのは理性がなかったら出てきません。理性と欲求が絡んで理想が生まれてくる。動物には志はない。だけど、欲求と理性が絡んで志が生まれてくる。何か社会に大きな問題があったならば、他人ごととして見てるんじゃなくて、俺がなんとかしたろうやないかと。みんながそんなに困っとるんやったら、俺がなんとかしたろうやないか。そういうこの自分の身に降り掛かる苦難ですね、その降り掛かる苦難というものが、自分の志をこの与えてくれる原理になってくる。そういうこの志のつくり方、理想のつくり方というのは３つあることをですね、この前回、お話をしたんですけど、とにかく、この命から湧いてくる欲求として理想を持つこと。理想を持って生きなければ、人間的な生き方は生まれない。動物は与えられた環境にどう対応するか、どう適応するかだけだけど、人間は与えられた環境をどう変えていくか。与えられた現実よりも、より素晴らしいものをつくっていく。そこに人間的な生き方のですね、基本原理がある。だから理想を持たないといけないわけですけども、とにかくそういうこの理想を持って生きることがですね、まずは自分の人生を生きる基本である。自分の命から湧いてくる欲求を実現する。欲求として理想を持つことによって、自分の人生を生きるという、そういう道筋に入ることができるわけですね。**

**で、２番目は、問いを持って生きる。これも感性から湧き上がる問い。なんでやろうなとかですね、なんかもうちょっと便利にならんかな。なんか納得できんな。そういう感性から湧き上がる問いというものを持ってですね、そして、その感性から湧き上がる問いっちゅうことは、命から湧いてくる問い。命から湧いてくる問いに対して答えを与えるから、命は満足する、命は喜ぶ。そういうふうにして、この自分の命を成長させていく、自己実現の人生というものを生きることができるわけなんですね。先生から与えられた問題に答えても、本当には自分は成長しません。先生から与えられた問題に答えるだけでは、頭がよくなるだけであって、自分の命は成長しないし、この自分の意識は成長しない。だけど、命から、自分の命から湧いてくる問いに答えを与えることによって、その人自身が成長していく。先生から与えられた問題に答えることは、ある意味で苦しみである。だから、自分の命から湧いてくる問いに答えを与えることは、命の喜びとなる。命の喜びとなるような、その答えというのは、命に染み込んでいって、本当に自分のものになる。**

**だけど、先生から与えられた問いに答えてるだけでは、観念しか成長しない。頭しか成長しない。本当には自分は成長しない。先生から与えられた問題に答えてるだけでは、頭のよいけだものになってしまう。自分の命から湧いてくる問いに答えを与えることによって、命が成長していって、そして、この人間性そのものが成長していくというですね、そういうことになってくる。命から湧き出てくる問いに答えを与えるから、命が喜ぶ。そして、命にその答えが染み込むから、一生忘れない。無理やりに勉強して覚えたことはすぐ忘れてしまう。だけど、命からなんでやろうなという、そういう問いが湧いてきてですね、で、いろいろ調べた結果、ああ、そうなのかとわかったことは、もう命に染み込むから、一生忘れない。それが自分をつくるということになるわけですね。とにかく、自分の命から湧いてくる欲求と、自分の命から湧いてくる問いを、この原理にして生きることがですね、この自分を自分で教育するという、そういう生き方になって、本当の自分をつくる、個性ある自分をつくる方法論なんですよね。**

**本当に自分で自分を教育していくためには、理想と問いがなければならない。命から湧いてくる理想、命から湧いてくる問いがなければならない。でなければ、本当の自分はつくれない。もっともっと仕事をしながら疑問を持つべきだ。なんでやろうな、どうしたらええやろうな。自分の命から湧いてくる、自分の問いを持たないと、本当にはその仕事に積極的に関わっていけない。そして、自分自身が自分の仕事をしながら湧いてきた問いに答えていくことによって、自分の仕事の仕方が、能率が上がっていってですね、そして、この自分らしい仕事の仕方、自分の気に入った仕事の仕方、これが俺流や。これが俺のスタイルや。そういうふうなこの自分流の仕事の仕方というのが身に付いてですね、そして、仕事が楽しくなっていくんですね。人にああせえ、こうせえと言われてやってるあいだは窮屈で、とにかく苦しい、つらい。奴隷みたいや。自分からですね、こうしたほうがいいんやないか、どうしたもんかという、そういうふうなこう疑問が湧いてきて、そして自分がそれに対してこうしてみたらどうかと思ってやってみる。そういうふうにして自分の命から湧いてくる、この問いに対してですね、答えを与えていく。そういうことをすることによってですね、その仕事の仕方に自分流という流儀がこうできてくるわけですよね。そういうふうにして仕事が楽しくなっていくんですね。**

**とにかく、まずは他人から教えてもらわないかんことから始まるかもしれませんけども、だんだん仕事をしてる間にですね、自分の命からいろいろ問題が湧いてくる。なんか納得できんな。どうしたらええやろうな。なんかここのところ、もうちょっとなんとかならんかな。なんかもう少しぴったりこないな。どうしたらもっとぴったりくるんだろうな。どうしたらもっと納得できるようになるんだろうな。そういうことを自分で問いながら、こうしてみたらどうだ、ああしてみたらどうだで、答えを与えていく。そういうふうにして、だんだんこの自分流の生き方ですね、これが俺流という、俺のスタイルというのがこうだんだん決まってきて、そして、自分で自分を教育する。自分らしい自分をつくっていくということができるわけですね。**

**次、３番目は、この人間としての成長意欲。自分で自分を教育していこうと思ったら、もっと人間として成長したいというですね、そういう人間としての成長意欲がなかったならば、自分で自分を教育できない。人間としての成長意欲が止まってしまったら、もう奴隷だ。他人に言われるままに動くしかない。自分自身の中にもっと、俺は男として成長したい、女として成長したい。そういう思いがある限りにおいてですね、自分で自分を成長させる。自分で自分をつくっていく。そういうふうなことができる。自分の中から人間的成長意欲がなくなってしまったら、もうあとはもう、本当に奴隷か家畜になってしまう。人の言うように自分が動くしかない。何がしたいっちゅうことがない。どうしようということがない。もうそうなったら、本当にこの自分でも生きがいのない、面白くない、本当しらけた人生になってしまうんですね。やっぱり、人間は本当にこう、みんな個性を持ってますから、本当に自分らしい個性ある人生というものをですね、つくっていく。**

**そのためにもっともっと、この自分自身を表現していきたい。もっともっと自分自身を出したい。そういうこう人間としての成長意欲をですね、能力においても、もっともっと成長したい。人間性において、もっともっと成長したい。いろんな面で、もっともっと素晴らしい人生を生きたい。もっともっと幸せになりたい。そういうふうなですね、人間としての成長意欲、そういうものをこう持ってる限りにおいて、自分で自分を教育していく。そういうことができるわけですね。そういうこうもっと幸せになりたいとかですね、もっともっとこの能力を高めたいとか、もっともっと自分の人間性を磨きたいとかですね、そういうふうなこの欲求が命から湧いてこなくなれば、確実にその人の成長はもう止まってしまいますから、あとはもう、自分でどうのこうのしたいということがなくなってしまったら、もう人の命令によって動くしかないんですから、本当になんかこう、つまらないというか、面白くない人生になってしまうんですよね。自分の命から湧いてくる、そういう成長意欲があることによって、人生は面白く、楽しく、生きがいを感じて生きることができる。とにかく自分で自分を教育するための基本原理は、理想と問いと成長意欲ですね。理想と問いと成長意欲がなかったならば、自分らしい自分、自分の気に入った自分、俺の人生というものを生きることはできない。**

**次、３番目ですね。人間が成長するということは、成功への道を歩んでいく。もっともっと幸せになっていく。人間が成長するということは、なんらかの意味で、今できないことをできるようにしていく。そういう道筋なんですよね。今できないことをできるようにしていくということは限界への挑戦である。人間は生まれてから死ぬまで、限界への挑戦という、そういうこの生き方をせざるを得ない。それがこの成長するというプロセスなんですよね。これは、おぎゃあと生まれれば、お父さん、お母さんは、自分の子どもに対して、這えば立て、立てば歩めの親心なんてなことを言ってですね、常に今できないことをできるようにしていくという、そういうこのことを望んで子どもの教育をするわけですけど、とにかく成長するっちゅうことは、なんらかの点で、今できないことをできるようにしていくという努力の連続である。で、今できないことをできるようにしていくっちゅうことは、今、自分の持っておる力の限界への挑戦だ。すなわち、今、自分の持っておる知力の限界、気力の限界、体力の限界に挑戦していく。この限界への挑戦という、この生き様がですね、人生に感動を呼ぶ。あるいは、命を輝かせるという、そういう生き方になってくる。今、自分の持ってる力でできることしかしようとしない。そういう人の生き方には感動はない。命は輝かない。何かしら、今、自分の持ってる力にこの、もっと伸ばしていこうとするね、そういう努力をすることによって、初めて命は輝くというか、本当に生きてるという、そういう状態になる。命そのものは、この変化し、成長することを望んでますので、変化しないということは死んでることなんですよね。で、よりよい方向性に変化することを成長というんだと。だから、なんらかの意味で変化してる。よりよい方向性に変化してる。それが生きてるっちゅうことであって、命が輝くというですね、そういうこのあり方の原理だ。その意味において、この今、自分の持っておる力の限界、すなわち、今、自分の持っておる知力の限界、気力の限界、体力の限界に挑戦していく。そういうふうな生き方をですね、することによって、この自分自身の持ってる力がどんどん出てくる。今、自分の持ってる力でなんともならんという、そういう状況に陥って、だけど、なんとかしたいと思って頑張ってる。それが限界への挑戦ですけども、今、自分の持ってる力でなんともならん。だけど、なんとかしたいと思ってると、今、自分の持っておるこの力ではない、命に潜在する能力が湧いてきてですね、そして、その新しい力を持って生きていくという、そういう状態に成長できる。**

**命に潜在してる能力を引き出してこようと思ったならば、絶対的にこの限界への挑戦という努力は欠くことができないんですよね。で、学校に行ってるあいだは、それを無理やりに先生からこの指導をされてですね、限界へ挑戦するっちゅうことを毎年毎年、させられてきたんですけども、社会に出てしまうと、そういうふうにこう、無理やりに自分をしごいてくれる人がいないもんですから、ついつい怠けてしまって、今、自分の持ってる力でできることしかしようとしない。今、自分の持ってる力でできんことは、できませんと断ってしまう。だから、この本当の自分、個性ある自分というのが出てこなくなってきてしまって、そして、この限界へ挑戦しないから、命は輝かない。そして、成長が止まってしまう。成長が止まってしまうから、仕事においては、つらさが出てくるわけですよね。自分が成長しておったならば、この仕事、新しい仕事をすることに面白みがあるわけですけど、自分が成長してないと、新しいことを与えられると、嫌な感じがするわけですよね。**

**今、自分の持ってる力でできんことをやらされてしまうようになってくると、なんか嫌だな。つらいというかですね、なんかそういうこう、できることならするんだけど、できんことをさせられてしまうっちゅうことは、非常にこうなんか、いじめられてるみたいな、そういう錯覚に陥ってしまってですね、実はそれは自分を成長させるために与えられた仕事なのにですね、できんことを与えられると、なんか意地悪されてるみたいなですね、いじめられてるみたいな、そういう感覚に陥ってしまって、会社を辞めてしまうような人も多い。だけども、その人を成長させてあげようと思ったら、その人が今、持ってる力でちょっと難しいかなという仕事を与えてあげることがですね、その人を成長させてあげる方法なので、今、自分の持ってる力でできない仕事が与えられたとき、それを愛だと思わなければならない。だけども、成長意欲のない人は、それを意地悪だ。あるいは、何かしら、この自分につらく当たってくるみたいなですね、そういうふうなこの意識になってしまって、会社を辞めてしまったりなんかする。**

**とにかくこの自己実現の人生、本当に自分の持っておる能力をどんどんこう引き出しながらですね、自分が成長していく、伸びていくという、そういうこの人生を歩もうと思ったら、今、自分の持ってる力でできないことをできるようにしていくという、そういう生き方をなんらかの点でしていく以外にないんですよね。そのためには、今、自分の持っておる力でできない仕事が与えられたとき、それを、自分を成長させてあげようという思いで与えられたもんだというふうな理解の仕方をしなければならない。自分の今、持ってる力でできる仕事しか与えられないっちゅうことは、もう自分の成長は望まれてないんだと。もう自分は見捨てられてしまってるんだとこう、思わないかんぐらいのことで、会社のためにその人を成長させてあげよう。その人を成長させてあげることによって、その会社のために働いてもらおうと思う気持ちが上司にあったならば、どんどん、どんどん、その人の力で、ちょっと難しいかなということを与えられるはずなんですよね。それを嫌がっておったんでは、会社の役に立たないだけじゃなくて、自分自身の能力が、潜在能力が出てこない。**

**とにかく、そういうことでですね、この人生においては、さまざまな問題や悩みや苦労が付きものですけども、だけども、苦労、問題、悩みというのは、常に自分を成長させるために出てきてくれてるんだというですね、そういう思いがなかったらいかん。今、自分のやってる仕事の中から出てくる問題、悩みというのは、そういう問題、悩みを乗り越えていく力をつくっていかないと、君はこの道では伸びない。この道では成功しない。そのことを教えるためにですね、問題、悩みは出てくる。こういう問題を乗り越える、こういう問題や悩みを乗り越える力をつくっていったら、君はこの道で成長していって、成功できる人間になるんだ。どういう能力をつくったら、この道で伸びて成功できるのか。そのことを教えるために出てくるのが、今、自分が歩いとる道から出てくる問題、悩みの意味だ。そういうふうに考えないといかんと。**

**自分が就職した会社の中から生まれてくるさまざまな人間関係のトラブルの悩み、これもやっぱり、自分を成長させるためには、こういう人間関係の問題を乗り越える力をつくっていかないと、君の個性ある人生を実現することはできない。そういうこのためにですね、人間関係のトラブルも出てきてくれてるわけですね。自分を成長させるために。問題、苦しみ、悩みというのは、自分をこの駄目にするために出てくるんじゃない。自分を成長させるために出てきてくれてるんだというですね、そういう思いが、そういう理解が大事であります。実際問題、この命をつくった母なる宇宙というのはですね、その自分が生んだ子どもたちである命を進化させるために、環境の激変という問題を与える。環境の激変というのは、うっかりしたら、全生物が絶滅するかもしらんというふうな、そういうこの状況を与える。そのことによって、自分が生んだ子どもたち、命をですね、進化させるという、そういう働きをしてるわけですね。その意味では、環境の激変というのは、子どもを成長させるための愛の働きなんだ。愛のために、愛をもってしてるんだというふうに理解しなければならない。**

**そういうふうに考えると、われわれの人生のプロセスにおいて出てくるさまざまな問題や悩みというのはですね、すべてこれは自分を成長させるために出てきてくれてるもんだという、そういうこの理解の仕方をする必要がある。だけども、出てくる問題すべてをですね、乗り越えていこうと思ったら、これは不完全な人間においては無理なんですよね。人生においては、逃げてもいいこの問題もある。また逃げなければならない問題もある。だけど、絶対に逃げたらいかん問題というのは、自分が自分の意志で選び取った道筋から出てくる問題、苦しみ、悩み。これは自分が選んだ道から出てくる問題なんだから、逃げたらいかん。自分が選んだ道から出てくる問題から逃げるっちゅうことは、これは人間として卑怯な生き方である。自分が選んだ道から出てくる問題から逃げるのは、これは責任放棄だと。しかも、自分が選んだ道から出てくる問題というのは、その道で成長するためには、その道でこの成功するためには、またその道で幸せになっていくためには、こういう問題を乗り越えていかないかん。そういう形で、人間関係のトラブルも出てくるし、また仕事上の悩みも出てくる。これはすべて自分がその道において、この成長し、また成功し、幸福になるためにどうしたらいいのかを教えてくれる。そのために出てくるわけですね。これはもう結婚においても同じである。**

**そういう意味で、この限界への挑戦というですね、今、自分の持っておる力の限界に挑戦していく。今、自分の持っておる知力の限界、気力の限界、体力の限界に挑戦していく。そういうこの生き方をですね、貫いていくために、一番大事なこの教訓は逃げたらいかんということですね。人生、逃げたらいかん。向かっていくという、この気迫であります。問題から逃げない。すべて自分を成長させるために出てきてくれてる問題なんだから、逃げてどうするんやと。向かっていくという、そういうこの意識をですね、自分の中に持ち続けなければならない。だけども、どんな問題からでも逃げたらいかんのやない。自分が選んだ道から出てくる問題、苦しみ、悩み、そっからは逃げたらいかん。だけど、自分が選んだ道から出てくる問題とはいえ、またそれも全部、自分が引き受けていかないかんと思ったら、これはちょっとつらいかもしらん。だから、最終的には何か一つでいい。俺はこういう問題からは逃げへんぞ。私はこういう問題からは逃げない。そういうものを何か一つ持っておったらですね、その方向性へは成長することができますから、それで一応、人生は大丈夫だ。そのことによって、個性ある人生を生きることができる。自分の目の前に出てくる問題の中から、どういう問題を選び取って挑戦していくか。それも個性をつくる重要な原理なんだ。そういうふうにですね、考えておかなければならない。**

**だけども、基本的にはね、自分が選んだ道から出てくる問題というのは、どんな問題が出てきてもですね、これはそこから逃げることは卑怯なんだ。それから、その問題を引き受けていくことは自分の人生の責任なんだ。だから、どんな問題が出てきようと、俺に任せておけ。俺がなんとかしたる。心配すんな。そう言って、自分がそれを乗り越えていくというですね、そういうこの逃げないという生き方を本当はしなければならない。そうすると、今、自分の持ってる力でなんともならんという状況に立って、尚且つ、その問題から逃げないっちゅうことをしてると、そこで初めて自分の命に潜在する、自分の底力、潜在能力が湧き上がってくるという、そういう状態になってですね、そして、この目覚ましい成長が、自分の人生に、自分で感じられる。そういう状況になるわけですね。**

**とにかくこの、今、自分の持ってる力でなんともならんというふうな、そういう状態に立ち入ったときが、本当の悩みであり、本当の苦しみである。そこから実は、本当の自分の人生が始まるんだと。これは前にも申し上げたことですけど、今、自分の持ってる力というのは、これはだいたい学校教育で他人から教えられて、自分が獲得したような知識や技術が理性能力なんですよね。だから、他人からこの教えられた知識や技術というのは、これは自分がつくったもんじゃなくって、他人がつくった知識や技術をですね、他人から教えてもらって、自分がそれを学習して、習得して、自分の身に付けたものだ。それは、今、自分の持ってる理性の力で生きてる限りはですね、他人のつくった知識や技術で生きてるという、そういう状態であって、これは本当の自分の力で生きとるのではない。今、自分の持ってる理性の力で生きてるという状態は、一種、他人のつくったものをパクってる、パクリの人生なんですよね。他人の力で生かしてもらってるようなもんだ。本当の自分の力というのは、他人がつくった知識や技術は役に立たなくなってきてですね、習ったものが役に立たなくなってきて、そして、その今、自分の持ってる力ではどうしようもない。**

**だけど、なんとかせんことにはやっていけへんというですね、そういう状態になって、命から潜在能力が湧き上がってくる。そこから本当の俺の力で生きるという人生が始まるんだ。命から底力が湧いてくる。そこから俺の人生が始まるんだ。そこから俺の力で生きる段階に入るんだ。今、自分の持ってる力で生きてる間は、パクリの人生だ。本当の俺の人生やない。それは他人の力で生きてるようなもんだ。他人から学んだものが役に立たなくなって、だけど、なんとかせんないかん。そうして頑張ってると、命から能力が湧いてくる。命から力が湧いてくる。命から気付きが湧いてくる。そこから本当の俺の力で生きる人生が始まるんだ。それが個性の時代を生きる生き方なんですね。本当の個性というのはそこから出てくるんですよ。他人から学んだ、学校で学んだことをやってる間は、これはまだまだ個性がない。本当の自分というのは、命から湧いてくるんだ。この命から湧いてくる力で生き始めたとき、知恵で生きる、気付きで生きる、潜在能力が湧いてきて生きる。そうなったとき、初めて俺の力で生きる人生、俺の人生というものが始まるんだ。本当に俺の人生を生きようと思ったら、われわれは今、自分の持っておる力の限界に挑戦する。今の知力や気力や体力の限界に挑戦する。そのことによって、俺の力で生きる。本当の俺という個性を持った人間の、俺にしかできん生き方というものが、そこからこう生まれてくるわけですね。それが本当の意味での自己実現だ。自分の命に潜在する能力を引き出すところから自己実現の人生が始まる。**

**この今、自分の持ってる力でなんともならんという状態に陥ってですね、だけどなんとかしたい。このままでくたばってなるものか。このままでは引き下がれへんと。なんとかこの問題、乗り越えていかないかん。そういうことでですね、今、自分の持ってる力を全部使い果たしてしまってなんともならん。万策が尽きた。そういう状況に立ちながらも、尚且つ、なんとかそれを乗り越えていこうと思って頑張ってるとですね、そうするとですね、このなんで潜在能力が湧いてくるのか。なんで今、自分の持ってる力を全部使い果たしてしまって、だけど、なんとかしたいと思って頑張ってると、そこでつぶれないで、そこでつぶれてしまわないで、だけど、なんとかしたいと思って頑張ってると、なんでこの潜在能力が湧いてくるという、その気付きが湧いてくる、知恵が湧いてくるという状態になるのか。それは、この人間の命は原理的にいって宇宙とつながってますからね。だから、この人間の命の中には、母なる宇宙のその摂理の力が働いてますからね。だから、自分の生んだ子どもたちが、必死になってこの頑張って生きておる。今、自分の持ってる力を全部使い果たしてしまって、だけど、なんともならん。だけど、なんとかしたいと思って頑張ってる。そうすると、子を生んだ母ならばね、自分の子どものそのもがき苦しんでるその状態を安閑と見つめておることはできない。なんとかしてあげたいという、母なる宇宙の愛が働き始める。そのことによってですね、その母から与えられた潜在能力、生まれながらに持って生まれてくるのが潜在能力ですからね。その能力が母の愛の力によってなんとかしてあげたいという、その愛の力によって、その潜在能力が目覚めて、そして、湧いてきて、その目の前の問題を乗り越えさせてもらえるという、そういう状況になるわけであります。**

**潜在能力というのは、おぎゃあと生まれた瞬間に全人類共通のものとして与えられてるんですよね。だから、命から湧いてくる能力というのは、これは人類に与えられておる、類の力なんですよ。われわれが勉強してね、獲得したものは、自分で学習して獲得したもんですから、単なる自分の力ですけども、潜在能力というのは、全人類に与えられてる能力である。これも何回も申し上げたことですけども、潜在能力ってどこに潜在してるんですかといったら、それは染色体の中に潜在しておる。染色体の中の遺伝子が潜在能力そのものである。遺伝子というのは、能力が物質化したもんなんだ。しかも、その遺伝子というのは、全人類共通のものなんだ。だから、今、自分の持っておる力、パクった力がですね、役に立たなくなってきて、だけど、なんとかしたいと思って頑張っておると、そうすると、その自分の子どもがなんともならん状況でもがき苦しんでる。だけど、なんとかその苦しみに負けないで立ち上がろうとしてる。母なれば、なんとかしてあげたいという思いが湧いてくる。いわゆる、その人間の生き方の、もがき苦しむというその状況がですね、ある意味で、母の母性愛をくすぐるような、そういう状況になってきて、なんとかしたい、なんとかしてあげたい。そういうふうなですね、この意識が、この命に芽生えてきて、そのことによって、母が与えてくれた潜在能力であるものがですね、この母の愛によって目覚めて、そして、自分の命から知恵として、気付きとして湧いてくる。そういう状態になるわけですね。自分が苦しんでると、母の愛が働き始めて、そして、助けてくれる。それがこの命から湧いてくる潜在能力の顕現、知恵、気付きというふうなもんなんですね。**

**実際問題、われわれ一人ひとりの命は、この生物学的にいって、生理学的にいって、宇宙とつながってるんだ。この命をつくったのは、宇宙の摂理の力ですからね、われわれは寝ておっても生きておる。寝ておっても生きてるということは、命は自分で生かしてるんじゃない。命を生かす力は、寝ておっても生きてるということは、宇宙の力によって生かされて生きておるという状態なんだ。寝ておるときには、われわれは宇宙からエネルギーを吸い上げる。そして、活動状態に入ると、宇宙からもらうエネルギーよりも放出するエネルギーのほうが大きいから、だんだん疲れてくる。そして、エネルギーが尽き果ててしまうと、眠たくなってくる。だから、寝る。大地にひれ伏して寝てると、そうすると、その宇宙からエネルギーがその命を通して与えられて、また蘇えって元気になってくる。われわれ宇宙の中におるわけですからね、寝ることそのこと自体が宇宙にかえる、宇宙に身を任せる。そういう状態の意識レベルになるわけですよね。だから、宇宙からエネルギーが与えられる、使わないから、寝てるから、使わないから、エネルギーが充填される。そして、また元気になってくる。そして、朝、十分に寝て目覚めたら、すっきりしてですね、また活動力がこう湧いてくる。確実にわれわれは宇宙とつながって、宇宙からエネルギーをもらってる。呼吸するのも宇宙、呼吸をしてるんだ。**

**そういう状態でですね、この自分を生んでくれた、自分をクリエイトしてくれた命をこの地球上に生み出してくれた宇宙というのは、これはまさに命を生んだ母ということになりますからね。だから、その子どもが苦しんでると、母なれば、見過ごすことはできない。なんとかしてあげたいと思う。そういうこの力がですね、命にみなぎってきて、そして、その母から与えられた遺伝子という、この潜在能力が目覚めて、そして、その潜在能力が湧いてくるというね、そういう状態でその問題を乗り越えさせてくれる。これは母なる愛の力によって問題を乗り越えさせてもらえる。そのためには、その母の力が自分の命に働くためにはですね、必死でこの生き切るというですね、そういうこの生き方をしなければならない。なんとかしたいと思って必死で頑張ってると、なんとかしてあげたいという母性愛が命から潜在能力を顕現させてくれる。そういう状況になるわけですね。**

**だけども、その問題にぶつかってですね、ただ逃げないといって突っ立ってるだけでは、その張り倒されてしまったら一巻の終わりなので、自己実現というですね、この成長し続けていく人生というのを歩むためには、逃げへんといって突っ立っておっただけでは何もならんので、その目の前の問題を乗り越えていかなければですね、どうしようもない。その乗り越えていくということのために、まず基本的には逃げたらいかんちゅうことが大事なんですけども、その逃げたらいかんという気構えでですね、ただ努力しているだけで、その母なる愛が働き始めるのを待ってるという、そういう状態では、これはこの自分が努力してることにならないので、問題を解決するための努力をするためにはですね、やっぱり理性を使わないかん。問題を感じるのは感性だけど、答えを出すのは理性だ。で、理性でなんとかその問題を乗り越えていこうとする努力をする必要があるわけですね。で、その理性で努力するということが、まずはその問題を乗り越えていくための最初の段階なんですね。**

**で、そのためにどういう努力の仕方をしたらよいのかといったらですね、この問題を乗り越えていくために必要な努力の仕方というのは、どんな問題でも悩みながら考えたらいかん。問題を持ちながら考えたらいかん。悩みながら考えるとですね、八方ふさがりになってしまう。必ずその夫婦の問題で悩んだ場合でも、子どもの問題で悩んだ場合でも、会社の問題で悩んだ場合でも、どんな問題で悩んだ場合でも、とにかくはどうするかといったらですね、もしこの悩みが他人の悩みだとしたら、他人から自分に相談されたとしたら、自分はその他人にどういうふうにアドバイスしてやるだろうか。そういうふうに持っていかないと、理性で正しい回答を引き出すという、そういうことができないということですね。これはどういうことなのかといったらですね、理性を使って正しい答えを出そうと思ったならばですね、これは例えばの話をすると、深い森の中に迷い込んでしまったとする。深い森の中に迷い込んでしまって、迷い込んだ状態で、どちらのほうに進んでいったら、その森から早く出られるかなと考えてもですね、迷い込んだ状態で考えておっても結論は出ない。じゃあ、どうしたらその森から一番早く出るルートがわかるのか。答えが出るのかといったらですね、どうするかといったら、まずその森の中に生えておる一番高い木を探して、その森の中に生えてる一番高い木のてっぺんに登って、森全体を外から眺めたらですね、そこにおるんやったら、こう行ったらあそこに出られるという結論が出るわけですよね。これが理性の使い方なんですよ。**

**ということはどういうことなのかといったら、理性は客観性と普遍性の能力である。理性は物事を客観的に外から見る。で、また普遍性ちゅうことは、全体を見る。そういう立場を与えてあげないと、理性は正しい答えが出せない。だから、悩みながら考えたらいかん。どんな問題でも他人ごとにしてしまって、他人から相談されたら、自分ならどういうふうに言ってやるだろうか。どういうふうにアドバイスしてやるだろうか。そういうふうに考えるとですね、正しい答えが出せるという、そういうことになってくるわけですね。これはその夫婦げんかは犬も食わんと申しますけど、夫婦はちっちゃな問題で、がちがちになってこのけんかしてるんですけども、それを他人が見たら、またそんなことで、何をそんなことでけんかしてるのとこう言ってしまえるような、そういうことになってくる。外から見たら、そういう悩みからですね、脱出できるというふうな、そういうこの道筋がこう出てくるわけなんですけど、悩みの中に入ってしまってると、八方ふさがりになってしまって、そして、その悩みからなかなか脱却できない。他人の目で見たら、問題は案外となんでもなく解けてしまうものをですね、中に入ってしまうと、なかなかその問題の本当のこの姿が見えないという、そういう状況になってくる。これがまずですね、理性を使って問題を乗り越えていくという、そういうことをする場合の方法論なんですよね。まずそれをやってみないといかんと。**

**で、そういうことをやってみても、尚且つなんともならん。もう今、自分の持ってる理性能力ではなんともならん。そういう状況になって頑張ってると、最終的には、この母なる宇宙の愛が働き始めて、そして、自分の命の中から知恵が湧いてくる。そういう状態でですね、問題を乗り越えさせてくれる。そういうふうにしてですね、この本当の自分の力が湧いてくるという状態にまで、人間は生き方を深めていくことができるわけですね。で、これもやっぱり、この人生を生きていくためには、忘れてはならない重要な原理です。問題、悩みにぶつかったときに、限界に挑戦していく。今、自分の持ってる力でなんともならんという状況になっても尚且つ、諦めないで頑張ってる。そうすると、この母なる宇宙の力が働き始めて、なんとかしてあげたい。その愛が働き始めて、自分の命に潜在する能力が引き出されてきてですね、問題を乗り越えさせてくれる。そういう状況になってきます。**

**次、４番目の人生の鉄則は、決断に賭けるということですね。これは人間、生きるということは、一瞬一瞬がですね、ああもできる、こうもできる、そうもできる、どうもできる。いろいろこの道筋がある。今日もこうやってセミナーに参加することもできたけども、仕事をしてることもできたし、またひょっとしたら、早く帰ってデートすることもできたかもしらんし、いろいろな可能性がある。で、人間、生きるということは、そのいろいろ可能性のある中から、いかなる未来を、いかなる存在を選び取るかという決断が、この生きるということの実態なんですよね。生きるということは、何かを選び取ることなんだ。こうやって話を聞いてもらってても、お一人お一人、みんなその聞く姿勢が違うんですよね。これも個性なんですけども、どういう姿勢でこの話を聞くかということもね、これは自分では無意識かもしれませんけど、そういう態度を選び取ってるということなんですね。で、この場で、どういう姿勢で話を聞いてるかという、この態度は、必然的に、無意識的に自分の命の中に積み重ねられていって、で、こういう話をそういう姿勢で聞くという、そういう人間に自分自身をつくっていってるという、そういうプロセスなんですよね。で、この事実はもう一生、消えない。あんとき、あの場で、どういう姿勢で聞いておったか。これはもう一生、消えないものとして自分の命に積み重ねられていってしまう。それがその人の人間性をつくる。で、それがその人の人生を決定する１つの要因になってくる。**

**とにかく自分でそれを意識してるか、意識してないかは別にして、生きるということは、一瞬一瞬が、いろいろなことができる、いろいろ可能性がある。その中のどれを選び取るかというね、この決断が、この生きるということの実態なんだ。何かを選び取ることなしには、一瞬たりともわれわれはこの生きるということはできない。そして、その生きるということは、その決断をそれ以後の人生で自分が引き受けて生きていくという、そういうことになってくる。今、自分がどういうこのものを選び取るにしても、もう選び取った限りは、それは消えない。自分の命に積み重ねられていってしまう。だから、その決断は、それ以後の人生において、自分が引き受けて生きていくという生き方をせざるを得なくなってくる。で、これがこの人生は賭けだというね、そういうことになってくるわけですよ。今の自分の生き方、今の自分のあり方、今、自分が何を選び取ったかということは、もうそれは消えない事実なので、それはその以後の自分の人生において、それを引き受けてですね、その責任を自分が背負って生きていくという生き方をする以外にないんだ。その意味で人生は決断の連続である。そして、その決断をあとの人生で引き受けて生きていくという生き方をする以外にその生き方はないんだ。自分がそんなことは嫌だと言っても、それは避け難いことであって、自分が何かそのときに選び取ったものを必然的にそれ以後の自分の人生に影響を与えてくる。自分が嫌でも、とにかくはそれを引き受けて生きていくしか人生はない。それがこの人生の必然的な道筋なんですね。**

**人生というのは、一瞬一瞬が決断の連続であって、そして、その決断に賭けていくしか人生の生き方はないんだ。一旦自分が選び取ったものは、もう二度と取り返しがつかない。そこで大事なのは、決断とはなんなのかということをですね、ちゃんとこの知ってるということなんですね。だけど、一般的には決断するっちゅうことは、その多くの可能性の中から何かを選び取るということだけが決断だと思ってる人が多い。だけど、多くの可能性の中から何かを選ぶっちゅうことは、決だけであって、断ということにはなっていない。本当に決断しなければ、その素晴らしい人生は生きられないんですね。決断の決と、決めるということをしただけでは、人生は迷いに陥ってしまう。どうしてかといったらですね、いろいろ可能性のある中から何かを選んでですよ、結婚でもそうです、就職でもそうですけど、この人と結婚するっちゅうことを、その決断し、選び取る。で、選び取るということだけで人生を生きていった場合にはですね、その結果として何かしら、大きな悩みや問題が出てくると、必ずどうなるかといったらですね、この人と結婚したから、こんな問題が出てきた。この人と結婚したから、こういう悩みが出てきた。ひょっとして、あちらの人と結婚しておったならば、こんなことにはならなかったのにという悔いが出てくるんですね。これが決断のこの断ということをしないで、決という、決めるということだけで人生を歩み始めた人間が陥る迷いなんですよ。**

**本当に人間が悔いのない、幸福な、素晴らしい人生というものを生きていこうと思ったら、本当に決断しなければならない。決断とはなんなのかといったらですね、多くの可能性の中から、あるものを選び取ったならば、そのとき自分が選び取らなかったものの中にどんなに捨て難い、素晴らしいものがあったとしても、あるものを選んだならば、他の可能性は全部断ち切る。これが断ということなんですね。ある人と結婚したならば、もうそのとき結婚しなかった人の中にどんなに捨て難い人がおったとしても、ある人と結婚したならば、もう他の者への思いはすべて断ち切ってしまう。もう私にはこの人しかおらんというですね、そういうこの気持ちに自分をしていく。それが決断ということなんですね。決断ということは、決めるということと絶つ、この両方があって初めて決断である。そして、他の者への思いを断ち切ってしまうことによって、ひょっとしたらあちらのほうがという思いが出てこなくなってしまって、もう自分にはこの道しかないんだ。もうこの道を生き抜くしかないんだ。だから、どんな問題が出てこようと、それを乗り越えていくしか自分の人生はないんだ。そういうことになって初めて、この吹っ切れたですね、迷いのない、本当に自分の底力が湧いてくる。そういうふうな人生を生きることができることになってくる。**

**だけども、多くの方々が決断とは言いながら、決めるだけで人生を歩んでしまっている。だから、何かしら問題が出てくるとですね、常にひょっとしたら、向こうのほうがよかったんじゃないか。これは経営判断においてもそうですけど、問題が出てくると、ああ、この道を選んで失敗したなと。やっぱり向こうのほうがよかったんじゃないかなと思って引き返してしまう。もうそういう経営者は絶対に会社を発展させることはできない。問題が出てくる度に引き下がってしまうからね、会社は存続するだけであって、発展しない。だけど、多くの経営者はそんなことをやってるんですよ。問題が出てくる度にですね、ああ、この道を選んだことを間違いだったと。早く引き返さないと、このまま進んでいったら大変なことになってしまうかもしらん。そう思って、その問題から逃げて、その問題から引き下がって、その問題を乗り越えようとしない。結果としては、その問題を避けて通るからですね、だから、一応、問題はなくなったように見える。だけども、この前進することができないから、会社はそこで成長が止まってしまう。もう発展することはできない。ただ存在してるだけだ。**

**これも経営判断において大きな間違いやすいですね、このポイントであります。発展するためには出てくる問題を乗り越えるしかないのに、問題が出てくる度に引き下がってしまって、危険を冒したらいかん。多くの社員を路頭に迷わせたらいかんと思ってですね、問題が出てくると、無理をしないで引いてしまう。会社は発展しない。そこを勇気を持って、その問題を乗り越えていく努力をする。そうすることによって、より大きな発展をその会社は、つかみ取ることができる。そういう状態になるわけですね。これは人生の問題においてもですね、悩みが出てくる、問題が出てくるということは、何かしら間違いがあるんだと思ってしまうんですね。で、人間の幸せというのは問題がなくなることだ。悩みがなくなることだと思ってしまって、早く問題のない、悩みのない状態になりたいとこう思ってしまう。これが理性によって完全性を求めるが故の人生の迷いというんですね。ほとんどの方はそう思ってるんですよ。早く問題がない、悩みがない、そういう状態になりたい。だけど、残念ながら人間は不完全だ。だから、問題がなくなることはない。悩みがなくなることはない。永遠に問題と悩みはあり続ける。**

**だのに、早く問題がなくなってほしい。早く悩みのない状態になりたいと思っておったならば、その人は確実に一生を不幸で終わってしまう。一生、問題がなくならないんだ。だのに、問題がなくなってほしいと思ってるということは、その人は一生、不幸で終わってしまう。だけど、ほとんどの人がそういうことなんだ。一生、不幸で、人生を嘆きながらですね、あれこれ愚痴を言いながら生きて死んでいってしまう。これがほとんどの人間の人生のこの常であります。だけど、それは残念ながら、理性によって人生に完全性を求めるが故の迷いなんですよね。問題は絶対なくならないんだ。悩みも絶対なくならないんだ。生きるっちゅうことは、問題を乗り越え続けることである。経営をするっちゅうことは、悩みを乗り越え続けることである。問題がない、悩みがない状態では、経営能力は成長しない。生きる力は成長しない。問題と悩みを乗り越えることによって、経営能力も成長し、生きる力も成長する。問題、悩みは、常にあるのであって、なくなることはない。だから、問題が出てきたときにひるんだらいかん。逃げたらいかん。どの道を選んでも問題は出てくるんだ。この道を選んだら問題が出てこないという道はあるんじゃないんだ。**

**この人と結婚したから、こんな問題が出てきてしまった。ひょっとしたら、あちらの人と結婚しておったならば、こんな問題は出てこなかったのに。確かにこんな問題は出てこないかもしらんけど、また違った問題が出てくるようになってるんだ。誰と結婚するかによって、その人と結婚しなければ出てこない問題が出てくるんですよね。問題の出てこない道はない。問題が出てこない結婚はない。悩みの出てこない結婚はないんだ。そのときに、上手に選択したならば、問題の出てこない道筋がある。上手に選んだならば、あまり大きな問題が出てこない、その人と結婚できるというふうに、この思ってしまっておったらですね、問題が出てきたときに、ああ、これは失敗だと思ってしまうんですね。間違ったと。あちらの人と結婚しておったならば、こんな問題は出てこなかったのにと思って、一瞬もうその人は不幸になるわけですよね。ひょっとしたら、あちらのほうがと思った瞬間に、もうその人は不幸なんだ。そして、その意識が分散しますからね、だから、自分が選んだその人に自分の全情熱を傾けることができなくなってしまう。集中力が出てこない。だから、相手をも本当に満足させてあげることができなくなってしまって、相手も不幸にする。集中力が出てこないから、自分の底力が湧いてこない。だから、やることは全部、半端になってしまう。半端な人生で終わってしまう。これが理性故の迷い。問題がない、悩みがない状態が最高の状態なんだと思ってしまう人間の人生の過ちなんですね。**

**とにかく問題の出てこない道はない。悩みの出てこない道はない。悩みの出てこない結婚はない。悩みの出てこない仕事はない。問題と悩みを乗り越えることが人生であって、問題と悩みをなくそうと思ったら、これは原理的に間違った生き方になってしまう。このことをですね、基本的には忘れてはならないと。誰と結婚しても、五十歩百歩で同じなんだ。問題が出てこない人はいない。悩みが出てこない人はいない。とにかく基本的には、違った環境の中で成長してきたんですから、一緒に生活し始めれば、たくさんの違いが目立ってくる。いろいろ違うところが出てきてしまう。だから、同じじゃないと嫌や。同じ考え方やないと嫌や。同じ感じ方やないと嫌や。同じ価値観じゃないと嫌やと思っておったら、これは絶対に一生、一緒にやっていけない。必ず多くの摩擦が出てくる。それを乗り越えていく力をつくっていくしか、幸せに生きていく道筋はない。幸せに生きていく力をつくっていく方法はない。完全な人間においては、本当の幸せというのは問題がない状態ではない。悩みがない状態ではない。不完全な人間における幸せというのは、問題を乗り越える力を成長させること以外に本当に幸せになる道はないんだ。問題を乗り越える力を成長させることができたとき、われわれは何があっても大丈夫というですね、そういうこの幸せな、この安心、立命というですね、その安定した状況に到達できる。問題を乗り越える、悩みを乗り越えていく力を成長させることなしには、幸せな人生なんて絶対ないんだ。問題がない状態が幸せだと思っておったら、一生不幸だ。悩みがない状態に早くしようと思ったら、その人は一生、悩み続けなければならない。この原理をですね、われわれは忘れてはなりません。**

**ところが、ほとんどの人はこの原理を知らないし、また、忘れてしまって、そして、早く問題がなくなることを願い、早く悩みがなくなることを願う。だから、生き方は弱い。弱い生き方になってしまう。強い生きる力は生まれてこない。仕事においても同じなんだ。問題が出てくる度に、ああ、この道を選んだことは失敗だったな、そう思っとったら力は伸びるはずはない。まさに、あのNHKのですね、有名になった、あの『プロジェクトX』というですね、不可能を可能にした男たちのドラマの感動の人生は、とんでもない大きな問題が出てきた、そこから逃げなかった男たちのドラマなんだ。そこから初めて、人生の感動、本当の個性の輝き、そして、本当の生きがいと幸せが湧き出てくるというね、そういう状況になったんだ。あれがもし、問題が出てくる度にですね、間違ったと思って引き返しておったら、絶対にあのドラマはない。出てくる問題を乗り越えるということをしたが故に、あの感動のドラマが生まれたんだ。そこに本当の成功の道があるんだ。人生、成功の道は決断に賭ける。どんな問題が出てきたって、俺に任せとけ。俺がなんとかしたる。心配すんなといって乗り越えていく。それが本当の人間の成功への道を歩む方法だ。**

**とにかく問題の出てこない道はない。生きるとは問題を乗り越え続けることだ。だけど、それをあまり苦労なしに乗り越えていこうと思ったらですね、どうするかといったら、問題は感性が感じてる間に乗り越えないと、なかなか難しくなってくる。理性が問題だとわかったらもう遅い。手遅れや。感性がなんかちょっとおかしいなと思ってるときに乗り越えてしまわないと、理性で問題だとわかってしまったら、もうこれは大手術になってですね、ものすごく大きな苦しみが出てくる。理性が問題だといったら、もう遅いんですね。手遅れだ。なんか今日はちょっと胃の調子がおかしいかなと思ったときにキャベジンでも飲んでおいたらそれでいいものをですね、いっかでいってしまってですね、それが習慣になってしまって、ついには血を吐くところまでいって、これは大変だと、理性でわかってしまったらもう入院ですよ。自分の力でどうしようもない。自分の力で乗り越えられるという状況というのは、感じてる間なんだ。問題は感性が感じるんだ。答えを出すのは理性だ。理性が問題だとわかったら、もう手遅れだ。なんかちょっとおかしいな。なんかちょっとこの納得できんな。そういうふうなこの気持ちが湧いてきたとき、感性で問題を感じてる間に問題を処理し続けていったら、案外とたやすくですね、問題は乗り越え続けられる。それを理性が問題だとわかるところまで放っておいたら、これは大変だ。もう本当に血を吐くような努力せんないかん。自分の力でなんともならん。だから、誰かに助けてもらわないかん。そういう状況になってしまう。**

**とにかく人生は、決断というものがものすごく大事なですね、この課題なんですけれども、だけども、決断というのは決めるだけではない。断、断つことが最も大事なことだ。この会社に就職したならば、俺にはこの道しかない。もうほかのものは全部捨てた。そういうところからですね、初めてこの会社の中から出てくるすべての問題を乗り越え続けていって、この会社とともに発展していく、成長していく。そういう自分ができてくるわけですね。ひょっとしたら、向こうのほうがよかった。なんか問題が出てくる度に、ひょっとしたら、そんなことを思っておったら、もうこの会社では伸びられません。この会社で有用なる人物にはなりません。本当の自分の底力は出てきません。問題が出てくる度に引き返しておったらいかん。生きるということは、その出てくる問題を乗り越えることなんだ。自分が選んだ道から出てくる問題から逃げておったらいかん。決断したんだ。もう俺にはこの道しかない。この道でのし上がるしかないんやと。そういうふうにこう思っとらんと、本当の自分の成長ということはあり得ない。**

**それが決断に賭けるという人生なんですね。自分が成長するために必要なものは全部、この会社の中から出てくるんですよ。そこから逃げないで立ち向かっていくことによって、本当の自分が姿を出して成長し始める。ちょっとでも嫌だなと思ったら、もう乗り越えられない。逃げたいなと思ったらもう駄目や。もう勝負事でも、ちょっとでも逃げたいと思ったら、もう絶対勝てませんからね、これは。スポーツなんかでもね。どうしようもなくっても、最後まで食らい付いて、最後まで諦めんということをしてると、ちょっとした一発逆転の転機がね、ぱっと見えるんですよね。だけど、もう駄目やと思って、もう投げるような気持ちになっとったら、せっかく出てきたチャンスも見えないんですよね。もうこれは、もうスポーツをやってる人なら皆、知ってると思いますけど、とにかくはもう、逃げたいと思ったら負けてる。誰かに助けてもらいたいという依頼心が出てきたら、もうこれは自分の底力は出てこない。**

**とにかく決断に賭けるしか人生はない。決めたからには一本道やと。もう絶対ほかの道は考えん。そこから本当の大成功の人生が始まるんですね。人生は誰と結婚するか。どの会社に就職するか。どの道を選び取るかで決まるんじゃないんですよ。どの会社に就職しても、誰と結婚しても、どの道を選び取っても、五十歩百歩、全部同じなんや。全部問題、出てくるんやと。問題の出てこない道はないんや。結局、十分に考えて、ある人と結婚し、ある会社を選んで、ある道を選び取ったならば、あとはどの道を選んでも問題が出てくるんやから、あとはもう出てくる問題をばかになって、しらみつぶしに乗り越えていく。それしか人生はないんだ。そう思わんといかんと。だけど、自分が選んだ道に賭けるということをしていくためには、選んだときには、俺は最高のやつと結婚した。俺は最高の道を選んだ。俺は最高の会社に就職したんやと思っとらんないかん。でないと、賭けられない。最高の会社に就職したんやと思っとらんと、ほかを全部、捨て切ってしまうっちゅうことはできない。だから、決断に関しては、そのとき自分が持ってる力の全力を振り絞って、俺は最高の道を選んだと思っておらないかん。その代わり、選んだからにはもう、絶対迷ったらいかん。もう俺にはこれしかないんや。これっきゃないんやと。だから、結婚なんかでも、とにかくは結婚したからには、もう一本道や。もう地獄の底まで付き合ってやるぜ。その思いでですね、絶対、おまえを離さん。最後まで俺は責任を持つ。どんな問題が出てきても、俺に任せておけ。大丈夫やと言い続けないかん。それがこの決断に賭ける人生の本道だ。人生の要諦は決断にあるんじゃない。人生の要諦はどの道を選び取るかにあるんじゃない。人生の要諦は、選んだ道から出てくる問題を乗り越える努力をするかどうかだけで決まるんですよ。上手に考えたならば、素晴らしい道があるんじゃないんだ。どの道を選んでも同じなんや。人生の要諦は出てくる問題をばかになって、ばかになってしらみつぶしに乗り越えていく。その努力ができるかどうかだけで人生は決まるんですよ。例え決断が間違っておっても、出てくる問題を乗り越えたら、大成功の人生ですよ。とにかく人生の要諦は決断にあるんじゃない。決断から出てくる問題を乗り越える努力をするかどうか。それだけで人生は決まるんだ。どの道を選んでも、五十歩百歩、同じなんだ。だけど、賭けるからには、俺は最高のやつと結婚した。俺は最高の道を選んだ。そう思ってないと賭けられませんからね。賭けるためには、そのときの自分の全力を振り絞って選び取ることをせんないかん。だけど、賭けたからには、迷ったらいかん。もう出てくる問題をしらみつぶしに乗り越えるだけや。ばかにならないかん。いちいち考えておったら悩むだけやと。それが人生の要諦ですね。**

**最後の５番目ですね。意味と価値の確認。これは人間の心というのは、意味と価値を感じる感性である。人間、意味を感じないと、やる気にならん。価値や素晴らしさを感じないと命に火が付かん。燃えない。だから、どんなことをする場合でもですね、われわれは自分が今やってることの意味を感じながらやってなければ、その仕事に熱は入らない。意味を感じないで何かをするっちゅうことは、意味のないことをしてるんだ。価値を感じないで生きてるっちゅうことは、価値のない人生を生きとるんやと。そんな人生は生きたらいかん。生きるからには、意味と価値を感じないといかん。人生は感じてこそ人生、燃えてこそ人生。命から湧いてくるものがあってこその人生だ。感じてこそ人生、意味を感じてこそ人生、意味を感じてこそ仕事。価値や素晴らしさを感じてこそ、命は燃える。だけど、ほとんどの毎日毎日の仕事は惰性なんですよ。だから、自分は駄目になるんですよ。惰性ではいかん。一つ一つ、今、自分のやってることがどんなに素晴らしいことなのか。どんな価値があるのか、どんな意味があるのか。今、自分がこの場に、この役職におるっちゅうことは、会社全体の中でどういう価値があるのか。どういうこの役割があるのか。そのことを自分が感じながらですね、仕事をするという、常に何かしら、今やってることの意味や、価値や、値打ちや、素晴らしさを感じてるということが、人間として生きてる、人間として仕事をしてるっちゅうことなんだ。心は意味と価値を感じる感性だ。意味と価値を感じなければ、人間としての人生を生きてるとは言えない。**

**意味を感じないで何かをするというようなことは奴隷だ。家畜だ。やるからには、そこに意味を感じてないといかん。そこにどんな意味があるのかっちゅうことをちゃんとわかってそれをしてるというですね、そういう状態で仕事をすることを心掛けなければならない。意味を感じてこそ命は燃える。価値を感じてこそ命に火が付く。感じてこそ人生、意味と価値を感じてこそ人生。より深い意味を、より大きな価値を、より高度な意味を求めていく。そういうふうにしてですね、今、自分のやってる仕事に情熱を傾けていくことができるわけであります。とにかく、この人生を生き切る上でですね、絶対に外してはならない基本原則、これがこの５つなんですね。自信と謙虚さ、自分で自分を教育する、限界への挑戦、決断に賭ける、意味と価値の確認、人生は惰性ではいかん。とにかく意味と価値を感じて燃える。そういうこの人生をね、やっぱりこの求めていかなければならない。最高に意味と価値を感じたら、人間は死んでもいい。俺はこのためにだったら死んでもいい。なんでもしたる。そういうこの勇気、熱情が湧いてくるんですよね。意味と価値を感じないと、情熱は湧いてこない。ぜひこの５原則をですね、この自分の生き方に当てはめながら、より素晴らしい人生を生きるような、そういうこの気持ちを持って努力してもらいたいと思います。どうもありがとうございました。**

**司会：ありがとうございました。**